516

95

複写

始

176-95

道話の泉

專修大學講師
堤達也

大正
12.4.9
内交

來初心

大臣參議

新年

はしがき

徳川時代に心學といふものが流行して、專ら精神修養の講話をなし、極めて平易に通俗に、市井の人民を教化して、その效果が中々多大のものであつたが、その心學といふものは石田梅巖から始まつたといふことになつて居る。梅巖は通稱を勘平といひ、京都に住し、心學を創唱した人だといはれて居る。延享二年六十歳で歿した人である。その門人に手島堵庵、慈音尼葉蓮堂、中澤道二などいふ人があり、又、布施松翁、柴田鳩翁、脇坂義堂、奥田頼杖など、皆心學道の大家として、京には五樂堂、江戸には參前社といふものがあり、その他到る處に支社や出張所のやうなものがあつて、一時なか〳〵全盛を極めたものであつた。

さて右の通りの譯で、その心學といふものは、梅巖の創唱として、扨その

基く所は、何れから出たのであるかといふと、今日の學者が皆言ひ合せたやうに、陸象山、王陽明から出たのだといふことに說いてある。たとへば日本百科大辭典や、詳解漢和大辭典や、大日本國語大辭典や、猶その他のものにも、皆王陽明から出たのだといつてあるが、是に就いて余は大に疑なき能はざる次第である。今、日本百科大辭典の心學の部を見るに、

心學は陸象山に基く。陸氏は心即ち理なりと說き、王陽明は良知を致すを說く、而して心學の語は、實に王陽明の創唱せし處なり、陽明の語に、夫れ聖人の學は心學なりとあり、云々、日本にても、中江藤樹、熊澤蕃山、三輪執齋、石田梅巖の心學は之に基く、云々。

といつてある。思ふに藤樹、蕃山等のやうに陽明學派に屬するものゝ唱道する所の心學は、陽明に基くことは事實であるが、しかしながら心學は必ずしも此の派ばかりの有ではない。心學には神儒佛の三道を調和して、一派を立てたものもあれば、陽明派のものもあれば、朱子派のものもあるのである。但し自分は朱子派の心學だ、自分は陽明派の心學だなどゝ名のつて出たものはないが、しかしその論ずる所、その說く所が全くその樣になつてゐるのは明かな事實である。

そこで余は世間一般の學者の唱ふる所の「心學は王陽明に基づく、心學といふ語は王陽明の創唱である。」といふ說に大に反對する次第である。今、文成公全集を見るに、如何にも心學といふ語が、到る處に見えて居る。しかも同書中の象山文集序に

聖人の學は心學なり、堯舜禹の相授受する、曰く、人心惟れ危く、道心惟れ微なり、惟れ精惟れ一にして、允にその中を執れといふ。此れ心學の源なり。

といつてある。又、重修山陰縣學記に

聖人己に沒し、心學晦くして人僞り行ふ、云々。然れども指して禪學となして之を群訾す。嗚呼心學何によりて復た明かならん。

といつてある。そして全集中に心學の語が非常に多く用ひてあるが、その中で陽明は、朱子等の學は「心學」でないといつて居る。

そこで學者が、心學は陽明の創唱で、心學といふ語は、陽明の始めて唱へた語であるといふ樣に速斷したのであらうと思ふ。而も是れ明かに誤謬であるのである。よし又心學といふ語は陽明の創唱であると假定したにした所が、その心學といふ事柄は、決して陽明に始まつたのではない。否、陽明も己に堯舜道は心學だといつて居る。しかしその心學といふものを標傍して立つたのは、明かに陽明だといふであらうが、是が亦抑も誤りである。

第一に心學といふ文字は、何も陽明が創始したのではない。抑も心學といふ成語の物に見えたのは、唐の韓愈の詩が始めのやうである。韓愈の詩に

誰言擯老朋。猶自將心學。

といふ句がある。この心學の意は、心から學ぶの義であつて、今日の所謂心學ではないといふ人もあらう。即ち、將に心に學ばんとすと讀めば讀めないこともない。上田松井両博士の大日本國語大辭典には、此の義に解して居るらしい。然るに三省堂の漢和大辭典には、此の心學を、心を修むる學と解してゐる。然らば何れの說が正しいのであらう。和刻の五車韻瑞には、將二心學一ニあつて、心學をひきゆと讀ませる積りらしい。しかるに宋の黃庭堅の詩に、

今代捧二心學一。取レ笑如二東施一。

といふ句がある。此の心學はどう見ても、心を修むるの心學に相違ない。して見れば前の韓退之の心學とあるのも、矢張り同じものであつて、大日

本國語大辭典の說は誤りであらうと思ふ。然らば心學といふ事が、何も陽明の創唱であるといふわけには行かないと思ふ。黃庭堅は周濂溪などと同時代の人で、宋の道學者の仲間であるから、矢張り宋儒は心學を唱へたに相違ない。して見れば唐宋の代に已に心學の文學を使用してゐたので、猶此の外に二程や張載や朱子などの著書中に心學の文字があるかも知れない。よしないとしても、是等の學が心學であることには、疑點はないのである。程朱の說に靜坐を說いてあり、心法といふ文字の多いのを見ても、十分了解することが出來よう。

翻つて我が國の心學といふものを見るに、先づ翁問答に、

我が心を正しくするは、始終悉く心の上のことなれば、心學ともいふなり。此の心學を能く勤めぬれば、平人より聖學の位に至るものなり。故に聖學ともいふなり。

といてある。此の書は陽明派の中江藤樹の著であるが、性理會通や、洪氏の說などを引用してあるを見れば、朱子派の說を信奉してゐたことは事實である。一體此の翁問答は、寬永十八年の著であつて、その朱子派研究時代に書いたものである。寬永十七年、藤樹が三十三歲の時、王龍溪語錄を讀んで、始めて姚江の學に接し、後三十七歲の時、始めて王陽明全集を讀んだのであるから、翁問答に心學といふ語のあるのは、孔孟より程朱までのことを指していつたに相違ないと思ふ。そして不思議にも、此の書に王陽明のことが一語もない。どうも此の書は藤樹がまだ王陽明に觸れて居ない時の著に相違ない。只良知といふ文字が二三ケ所あるが、これはあとから書き足したのだといふ人もある。しかし良知といふことは、已に孟子にある語であるから、此所の良知は何も王陽明の良知に限つたことにも見られまいと思ふ。又、中山三柳の醍醐隨筆には、(寬文十年の自序がある)

孔子及び門人は皆心學なり。周濂溪、二程、朱子、陸象山、王陽明は皆心學なり。

といつてある。

北窓瑣談に、（橘春暉著）

近き頃心學といふことを行はれて、その講釋には聽衆甚だ多く、三百人五百人に及ぶ。最初を石田勘平といふ。此の人の時は未だ甚だしからず、その弟子を堵庵といひ、俗稱を手島嘉右衛門といふ。此の堵庵より大に行はれて、門人も甚だ多く、諸所に出で〻講釋す、云々。堵庵の弟子を道二といふ、此の人亦師に勝りて大に行はる。

とある。蜀山人の一話一言に、

心學といへることを京都にて專ら流行す。享保の頃、京都瓦町に石田勘平といふものありて之を弘む。勘平、號は梅巖、丹波桑田郡の人なり。都鄙問答、齊家訓を著す。門人を手島堵庵といふ、その道を得て大に流行す。その門人松ばや松翁（伊右衛門）尾張屋道順、中澤道二、三子を出弟

とあり。今是等の諸書を見るに、一言も王陽明から出たといふことが書いてないのである。然らば明治大正の人が何故に心學を王陽明から出たのだといふのであらう。百科大辭典の宇野哲人博士の說に固より、又、上田萬年、松井簡治二博士の大日本國語大辭典に、心學、（一）心より學ぶこと、（二）心學とは、明の王陽明の學說に、神道、佛法の趣味を混じたる一種の教義。としてあるし、服部宇之吉博士の詳解漢和大辭典に、心學は王陽明に基げる一種の教義。とあり、桑田春風の校訂鳩翁道話の序に

心學はその基く所は陽明學であるらしいけれども、その說く所は理論に重きを置かず、寧ろ當面の實踐問題を主とし、巧みなる譬喩を實例とを

以て、その當に然るべき所以の道を直覺頓悟せしめんとするにあり。

とある。されど以上の諸說は、何れも杜撰臆說であつて、全くの謬說なこ

とは爭ふべからざる事實である。太宰純の聖學問答に、

朱子は殊に佛道に倣つて心學を宗旨とせし故に、萬事を皆心法として說

けり。

といひ、その辨道書に、

貴公の仰に、心を修むることは、佛道勝れたるよし仰候。是は宋儒の心

學にくらべて仰候と存候。

とある。春臺の見は如何にも卓見である。心學を心法と同じやうに見てあ

るが、しかし既に藤樹は翁問答に、心學といふ文字を多く用ひしと同時に、

心法といふ文字も亦あちこちに多いので、是等を考へて見れば、心學心法

は何れも同じやうなものであらう。又、伊藤仁齋の童子問に、

古昔未だ理學の稱あらず、近世或は聖門の學を目して理學となし、心學

となし、性學となす。

といつてあるが、この心學はどうも陽明の心學をさしたのではないと思ふ。

その他に引用せる仁齋の心學は、皆宋儒の心學を指して居るやうである。

山鹿素行の聖教要錄に、

道統の傳、宋に至つて泯滅す。況んや陸王の徒をや。算ふるに足らざる

なり。唯、朱元晦大に聖學に功あり。然れども超出するを得ず。孔子沒

して後、儒學の士、宋に至りて三變す。戰國の法家縱橫家、漢唐の文學

訓詁專門の名家、宋の理學、學なり。

といひ、又同書に、

學者性命を嗜み、竟に心學理學の說あり。

といつてあるのは、皆宋儒の心學を指して居るのである。

以上の研究によつて見ると、心學といふものに二つの意義がある。一は心を修むる學問の義で、堯舜以來の道學のことであるが、一は狹義に用ひて、石門派の心學のことをいふのである。そして我が國では、通俗にこの後段の意義によつて心學といつて居るのである。然らばその石門派の心學の基く所は、何であるかといふと、前々より論ずる如く、決して王陽明から出て居ないのである。又、某氏の說のやうに、道敎を調和してあるといふのも臆斷である。但し奧田賴杖の心學道の話に、差別無差別平等一枚の理を說いた所などは、中々巧妙で又痛快で、莊子の齊物論を讀むやうな氣がする所があるが、去りとて決して老莊に出入して居ないことは事實である。

今、石門派の所說を研究して見ると、梅巖の鄒鄙田答に、

「程朱の所謂明鏡止水なり。」『朱子の所謂記誦詞章の俗儒にして、眞儒にあらず。』學問の至極といふは、心を盡し性をれば天を知る。天を知れば、天即ち孔孟の心なり。孔孟の心を知れば宋儒の心も一なり。一なる故に注も自ら合ふ。我に至誠の樂を畫けと望む人あらば、豁然として開けつゝ、手の舞ひ足の踏む所を忘れしものを畫くべし。此の處を傳に曰く、豁然貫通する時は、即ち衆物の表裏粗到らざるなし。」「朱子曰く、天より生民を降すは、即ち既に之に與ふるに、仁義禮智の性を以てせざるなし。」「心は氣に屬し、性は理に屬す。」

さいふやうな風に、今一寸あちこちから拔萃したものばかりでも、如何に程朱を奉じ居るがを伺ひ知ることが出來るのである。又、梅巖や堵庵は、四書、小學、近思錄を敎科書として門人に授けて居つたのである。奧田賴杖の心學道の話に、或人の問を擧げて、

御流義の心學は全く宋儒の學と見えて、孟子の性善說を專ら御信用なされ、云々。

こある。鈴田鵬の心學壽草には、その序文に、

朱文公、明德を註して曰く、虛靈不昧、衆理を具へて萬事に應ず、云々。

心法を石門に受く、云々。

こあり。奥田頼杖の心學道の話には、

さう見ると、人といふものは尊いものぢや。萬物の靈こいうて、衆理を具へて萬事に應ずる。結構な智慧こいふものを生れ付いて居る故、云々。

とある。此れ明かに朱子を奉じて居るのである。陽明は此の說を駁して、自ら說を立てゝ、「心は衆理具つて萬事出づ。」とせなくてはならないといつて居る。「即ち衆理を具へて萬事に應ずるこいふ時は、是れ猶萬事を以て外となして之を看るやうになるのでよくない。孟子は、萬物皆我に備はるといつて居るが、是萬事を以て我が心の內のことゝ見なければならない證據である。朱子は全く誤りである。」といつて居る。

格物致知の說も、石門派の說は全く朱說を奉じて居るやうである。陽明は格物の格の字を、孟子に、大人、人の心を格すの義こして、即ち正すの意だといつて居る。即ちその心をたゞして、その不正を去つて本體の性を全うするの義としてある。故に全く朱子と反對である。朱子はこれを萬事の理に到達するの義としてある。朱子は、物に至るこ訓んで、物理に到達するの義こするのである。即ち朱子は、客觀的實在の理に到達することゝ解するのである。これを陽明は大に反駁して、朱子の說の如くなれば、理と心こは二つのものとなつて仕舞ふ。斯の如きは眞理でない、理と心とは同一のものだこいふのである。但し朱子の格物說は、程子等の說とも異つて居て、全く朱子一流の哲學から演繹した格物である。その稱は、近思錄に、明道先生曰く、「格物こは、己を止しうして以て物を正すなり」こいつてあるのは、これが陽明の奉ずる所となつたのであらう。

さて右の通りであつて、石門派の心學を調べて見ると、陽明のことは一つも出て居ないのである。石門派の人々は陽明に觸れて居ない。陽明派の書を讀んだことはないと斷言して差支へないと信ずるのである。

さて又此の石門派は神儒佛の三教を調和した教義だといはれて居るが、然しその根本は儒學にあるのである。その始祖梅巖は、その始め神道を學ばうと心掛けたことがあつた。彼は二十三歳の時、京都に上つて上京の商人の家に奉公したが、始めは神道を慕ひ、何とぞ神道を弘めたしと願つたといふことであるから、非常の敬神家であつて、その說く講義の前には、必ず天照大神を拜したといふことであるが、しかしその本領は儒道であるらしい。梅巖の齊家論に、「我、不肖の身を以て儒を業とす。」といつてあり。その他、門人も自ら儒を業とすといつてあるのを見れば、孔孟を奉じて居ることは明かなことである。

但し此の派の人々が引用する所の書物や文句は、大抵四書であつて　程朱なぎを引くことは餘り多くない。そして何だか程朱などを引かずに直ちに孔孟の言に接しやうと努めたやうな風があるのも面白いことだと思ふ。老莊のことは滅多に出て來ない。鳩翁や賴杖なぎは一言も之に觸れてゐない。只、慈音尼蓁葭堂が道問答の中に「老莊の極意も孔孟の意に背いては居ないと言つてあるのや、奥田賴杖の心學道の話に、谷神だの、玄だの、大道廢れて仁義あり。などいつてある位のものである。

道話で一番面白く出來てゐるは、鳩翁道話と、心學道の話との二篇である。鳩翁は全く儒教本位であつて、神佛のことは餘り知らないやうな風がある。奥田賴杖は割合に此の兩教に通じて居るやうに思はれる。書中にも神道のことも、又佛教のことには、時々梵字などまで引出して說明してゐる所を見ると、神佛の方は鳩翁よりも精しいのであらう。終りに臨んで一

言すべきことは、世の德川時代の風俗習慣を研究する人や、國語の辭書を編輯せんとする人は是非此の道話を讀んで貰ひたいと思ふ。然るに從來の國語の辭書編輯者は、一つも是の道話に目を通さないと見えて、此の道話中の語を取入れてあるものがない。此の道話は民間の風俗習慣言語等が非常に這入つてゐるので、その時代の思想より始め、ありとあらゆる民情や言語が網羅してあるので、極めて有益なものであるにも係らず、今いふ通りに、是等の學者に顧られないのは誠に遺憾に堪へない次第である。故に余は、世の修身教育にたづさはる人は勿論猶進んで、今申したやうな學者研究者にも、是非一應目を通して貰ひたいと思ふ次第である。

鳩翁道話

柴田鳩翁が講述したものを、その子の武修が筆錄したものである。正三篇六卷は天保五年の刊行で、續篇六卷は同六年の刊行、續々三篇六卷は同九年の刊行で、凡て九編十八卷になつてゐる。

鳩翁、名は亨、或は惟敬といふ、字は陽方、通稱は謙藏、剃髪して鳩翁と號す、中年失明し、後專ら諸國を巡りて心學の講話を爲す。天保十年五月死す、年五十七歳であつた。

心學道の話

奥田粕杖の講話を、江戸の人平野橘翁の筆錄したものである。書名は、しんがく、みちのはなしといふのである。天保十四年の出版であつて、初篇より八篇に至る。鳩翁道話よりも餘程大部になつて居る。

粕杖は安藝の人で、名は在中、通稱は壽太郎といひ、京都に出で上河淇水に就いて心學の薀奥を探り、天保十年、江戸に出でゝ參前社に留り、日夜

その講話を爲したものが本書である。
今、本編は此の二部を校訂註釋したものである。

大正十一年十月

堤達也識す

本文は原、漢文なり。天保甲午は天保五年である。

鳩翁道話序

天保甲午の夏六月朔近夕、獨り齋中に坐す。柴田氏の子、偶々來り訪うて云ふ、請ふ餘暇に此の書を閲し、且つ一言を附せよと。即ち取つて之を覽るに、乃ちその乃翁の話を隨錄する所にして、命じて鳩翁道話といふものなり。因つてその文を審かにすれば、言は則ち戲に似て、而も悉く是れ孝悌の實なり。說は俚の若くにして、尙聖賢の旨に乖かず。語に曰く、道は邇きに在り、而して諸を遠きに求む、事は易きに在り、而して諸を難きに求むと。今翁の如きは、能くその邇く且つ易きに從ひ、世俗を敎諭するものに於て、實に勤むるありと謂つべし、覽るもの、その言辭の俚近を捨て、而して意味の深長なるものを取り、以て修身齊家の一助となさば、便ち是れ翁の本意なりと云爾。手島毅庵、五樂舍の南窓に識す。

●爾如　互に親しくすること。文子傳に作爾如交とある。

歟。

士の相須つや難し。才の難きにあらず、その己を知るもの即ち難し。而して一たび見るあれば、輒ち終身の交りを爲すは何ぞや。感する所あればなり。予が翁に於けるも亦然り、予庸愚の質、人を知るの明あらざれども、久しく莫逆の知己として、義骨肉の如く、自家一般、平素爾如の交をなすと雖も、笑談の間、時として覺えず容を改むるに至るは、翁の令德叡智人をして能く感發せしむる所あればなるべし。頃年諸州に遊歷して道々唱ふ。聽衆やゝもすれば千二千に及び、益を得る人常に多し。嗣子武修侍坐して聞く所を筆記せる、積んで若干卷となりぬ。往日或人上梓せんことを乞へども、翁の許さゞること久し。此の頃友人頻りに武修に計り、卒に世に弘くす。武修人と爲り謹厚實踐學んで倦まず。且つその之を記すること詳にして遺さゞるを以て、その志を覘るに足れり。冀くは此の編、年々增帙して窮りなからんことを、予此の舉あるを喜び、贅言を後に書するものは、抑も亦感ずる所あるが爲なり。

天保甲午秋七月

前川常營識

續鳩翁道話序

「貴きを欲するは、人の同じき心なり。人々己に貴きものある」をと曰へりしは、かけんも更なることにしあれど、いとも〳〵尊く嬉しき教になんありける。今又思ふに、物知らまく欲りし、人に優らんことを思ふも、無下に言甲斐なき痴人を置きては、大方の人と同じき情なんべし。實に世に益ありて、知らでは得あるまじき筋の、古、今の萬の事に深く心を入れて物せんは、いと目出たく、おむかしき業なりかし。そが中には、天つ空の有様、地の限りのこと、知らぬ國々の海山のたゝずまひ、人の心ざま、時世のならはしなどをさへに、まさ目に見たらんが如く、悟り明らむる人もあめるよ。さはいと〳〵難き業なるをや。さも難き業をだに、そこひの極み明らむらん人の心の悟性といふものは、いとも〳〵奇靈しきものにはあり

貴きを欲す　孟子の語である。

かけんも　齒牙にかけんもの意で言葉にいはじんもと同じ。

おむかしき　白しなどの意。又嬉しく思ふよろこぶなどの意に用ふ。面向と書く。

たゝずまひ　立ちたさま、ある樣子。

まさ目　まさしく、まのあたり。正目とかく。

あめるの　あるめるの略、あるらしい。

そこひ　眼病、障眼。

けり。しかはあれど、如何なることにか、己が心をば知らまく欲のせんとだに思ひもかけぬ人の多がるは如何にぞや。唐國の聖人の道は、その本は、心を知り心を正しくする外には出でざるを、その道に名高く、世に仰がるゝさまなるものも、よくせざれば心を旨とする道なることは、論はんものとも思はず、或は口にはしか言ひながら、己が心をも身をも修むる筋のことをば、露ばかりも物せざるやうに見ゆるもあるは、如何なることにかといとも訝しくなん。是等を以て思へば、かの外にある物を求むるは、難きに似て易く、己にあるものを求むるは、易きやうにて難き業にやあらん。さるを近昔の世より、心學といふものを立てゝ物する流ありて、その說きざま打聞くに、果敢なき戲言に等しく、誰も知りたらんことの樣に聞ゆれども、實には源深く、畏き書籍の道を俗言に和らげて物するにしあれば、いたく世の人に益ありて、いとも〳〵おむかしく目出たき業になんありける。

己も早くより此の道の書籍をも讀み、此の筋の人々にも、此れ彼れ親しく物して、彼の道話といふをも、屢次聞きたるに、己が心を知ることを先とし、心を知り得て、物學び萬に心を用ふれば、眞の道にはかなふものぞといふことを、旨といへるにて、實にさることになん。さて彼の「人々、己に貴きものあり。」とのたまへりし貴きものとは、やがて此の心の事にて、靈しとも靈しく、明かなりとも明かにて、行き至らぬ隈もなく、比ぶべき物もなきものなりといふを本にて、いとも〳〵細やかに、懇ろにも懇ろに物すれば、此の道に能く入り立てば、世の人に名をだに知られず、さもありげもなきものゝ中にも、思ひの外に、彼の泥の中の蓮、砂の中の白玉など言はん樣の人も出で來めれば、目出たしとも目出たく、寔に世に益あることと頼ひあらじと思ふに合せて、己が言甲斐なき心にも、いたく益を得たりと覺ゆる事なきに將あらずかし。

靈し　靈妙不思議なること。

泥中の蓮　泥のにありて、それに染まらぬ蓮のこと、惡いものゝ中にあつて、惑化を受けず、立派なるたとへ。

しがな　希望感動詞、さうしたいものだなあといふ意。

さあればかより　かうあれ

こゝに柴田翁の斯の道に悟り深く、近き世に並ぶべき人もなくものせらるれば、いたく遠からぬ國々よりは、請ひ聞ゆるまゝに、年毎に此處彼處行きめぐりて物せられ、その中には、その守の殿の前にても、彼の道話を聞え上げらるゝ樣などのことは、早くより聞き居て、一度だに對面してしがなと思ひ渡りぬるを、己れ思ひもかけず、我が君に從ひて、四年ばかりが程、阪に在りて、去年より此の京に移ろひ住むに、さきに大阪にて、此の翁の道話の席ものせられしことを、一二度聞き付けたれば、いかでとは思ひつれど、さあればかゝりといふやうにて、えものせず。此處に移ろひても事繁くなど、心にもあらで徒に月日を過しゝに、幸ひにも近き頃、此の翁さる故ありて、我が君の御前に内々に召されて、彼の道話を屢次聞えあげられけるは、いとも目出たき業になんありける。

かゝれば己も本意の如く對面して、何くれの物語も聞え交はしなどするこ

ばあゝあるといふやうに、いろいろと仕事があること。

我が君。参河吉田の殿様のこと。

中山美石。歌人である三河吉田の藩士で、本居大平の門に入り、古学を研究し、大に進歩せしめて世に稱せらる。本文序文も中々よく出來て居る。美石の名はうしとよむのだ。

とゝはなりて、嬉しうこそ覺ゆれ。かくて此の頃、彼の常に物せられ、我が君の御前にても聞え上げられたる說言ごもを、家繼げる子、武修主の露ばかりも洩さず書き記して、早く世に洽かる此の流の書籍の例に任せて、鳩翁道話と名けて、三卷板に彫られ、さて次ぎて此の卷をも物せられんとて、これが端に一くだりと言はるれば、頓て此の早くよりの事どもを、管々しきまでかくは物しつるになんありける。

天保六年九月、京の三條の堀河の家にて、三河國吉田中山美石識す

此の文、原文は漢文である。

大經。詩經、書經、易經、春秋、禮記、樂記のこと。

性。命の理。天の付與するいひ、之を命といふ、之を稟けて我に在る、之を性といひ、事物にあはるゝ、之を理といふ。

顏氏云々。論語子罕の篇の語である。

續鳩翁道話 序

柴田翁、中才明を失ひ、耳を以て目こ爲し、人を以て書こなし、耳を以て人を讀む。而して六經の語を誦し、道義の旨に通じ、以て性命の理を說き、人をしてその心を知つて、以て惡を窒ぎ善に趨かしむ。その世に功あるこゝ小少ならざるなり。夫れ聖人の道は廣し、大なり。顏氏は亞聖なり。猶彌高く彌堅く、既に我が才を竭して、而も從ふに由なきの歎あれば、則ち爾來の賢人君子、豈能くその閫奧に詣るものあらんや。乃ち亦各々その見る所を見、その知る所を知り、遂に自ら我聖人の蘊を得たりと許し、自らを以て是こなして、而して彼を以て非となし、互に相排擊して、而して此れも亦猶彼の如きを知らざるなり。之を兄弟牆に鬩ぎ、村夫席を爭ふと謂ふ。何ぞ據る所の狹くして、懷く所の寬ならざるや。

道の廣大なるや、之を譬ふれば猶河の如きか。一滴も水なり。百滴も水なり。千滴萬滴、大溝小渠、同じく皆水なり。同じく皆河なり。而して河にはあらざるなり。一滴も浸潤し、萬滴も浸潤す。大溝小渠、以て漑ぎ以て灌ぐ。皆以て物を育し、皆以て人を濟ふ。その瘴雨毒露にあらざるを以てなり。その彼此に於ける、何ぞ紛々として爭辨分駁することをこれ爲さんや。翁の道を說くや、之を心に得て、而して之を口に發す。竪に說き横に說き、控送手にあり。或は雜ふるに諧謔滑稽を以てし、人をして聞いて笑ひ、笑うて掌を拊ち、蓬々然として、覺えずその道に入つて、終に正に歸せしめて止む。是を以て國君卿太夫より、馬官廝養、婦女童豎に至るまで、悅んで之を慕ひ、敬して之に從ひ。皆稱して鳩翁鳩翁といふ。何ぞそれ盛なるや。翁、子あり、武修といふ。その侍講の次、旁より邦語を以て之を記し、編みて三卷となし、名づけて鳩翁道話といひ、刻して以て世に行は

- 蘊奥と つ、く字で、おくそこのこと。
- 兄筆、閱牆、詩經小雅の篇の詞である。
- 蓬々然、白得の兒、莊周が莊子夢に胡蝶となつたといふ所にある語なり。
- 厮養、めしつかひもべ。
- 吐屑、談話した一部分のこと。

る。苟ち四十七字を識るものをして、之を讀んで直ちにその意を領せしむ。今又その吐屑の餘を抄して三卷となし、以て之に續く、勉めたりと謂べし。但々吾が邦の漢土に於ける、言語同じからずして、而して文字も亦異なり。漢人の字は、一字數義を兼ぬ。吾が邦の一字一意の如きにあらず。而して又古今の分あり、雅俗の別あり、六經の若き最も甚しと爲す。若し精密に討究せざれば、則ちその聖經の旨に於ける、或は差謬の失なきこと能はざるなり。余も亦濟世に志あるものなり。竊にその是の如きを慮つて、鄉閭に於て一學館を設けて、經を積み書を貯へ、集會講求して、以てその義を致し、以て斯道を揚搉せんと欲し、之を圖ること三十年、今に于いて落々として合せず、桑榆景迫り、恐らくは將に終身志を齎して、成ることなからんとす。彼の浮圖氏の千仞の寶堂を造り、一塵にして成るに視ぶれば、その難易如何ぞや。儒道の吾が邦に行はれざること、斯の如くなる

- 揚搉、舉ぐること、搉は引くこと、之を興引して、その趣旨を陳ぶ、義、漢書に出づ。
- 桑榆云々、日が樹端にあるとき、日暮前のこと、後漢書に出づ。こゝは老年になつたこと。
- 落々、志の大にして合はざる兒、後漢書に出づ。

が、慨嘆すべし。吾願くは翁の妙舌を藉りて、以て金口の木鐸と爲さんことを、翁能く笑つて諾せんや否やを知らざるのみ。是を序す。爲す。

天保乙未臘月　胸痛　褥臥、起つこと能はず、門生某に口授して、筆錄せしめて以て贈る。事はその二十七日に在り。

源龍天　錫父

金口の木鐸　古、爲政者が教令を發する時用ゐたる八百篇に論語出づ。

源龍天　東都の儒者で號を弘用といふ。寶暦元年十二月歿す。

天保八年中の此の人首唱の下に京都儒者同心學敎協力して所を設置して專ら心學を敎ふ。

續々鳩翁道話序

書に曰く、「思ふを睿と曰ひ、睿を聖となす」と夫れ思ふは君子の尙ぶ所にして、學者の要となす所なり。孟子曰く、「心の官は則ち思ふ、思へば則ち得、思はざれば則ち得ざるなり。」と。それ人、聲色聞見の際に方りて、耳目の感に委ねて、而して以て思はざれば、則ち物、物に引かれて、而して心その官を失ふ。それ焉んぞ以て事物の綱維を立てゝ、而してその規則を定むるを得んや。是を以て君子の身に於ける、視るは、明を思ひ、聽くは聰を思ひ、色は溫を思ひ、貌は恭を思ひ、言は忠を思ひ、事は敬を思ひ、疑はしきは問はんを思ひ、忿りは難を思ひ、得るは義を思ふ。其れ而して後、心、一身の主となつて、而して四體その命を聽く。身稍恭敬、言語誠實、志常に正しうして、義常に立つ、聖經賢傳の旨、千端萬緒といへども、

景文は漢文なり。

忿りは難を思ひ　忿り腹立つ時は、後難の生ずることあるを思ふ。

その至處を要すれば、則ち亦復是に外ならざるなり。柴田子鳩翁、初、予が先人德軒先生に從つて、以て石門の學を受け、以て四方に講授す。不幸疾を得て明を失す。乃ち復た書を讀む能はず、然れども其の思ふや益々精しく、その學や愈々進む。天豈不思の官を奪うて、以てその思の官を進めんと欲するものか。抑々將た世の目あるものをして、以て思ふの貴きを知らしめんとするか。嗚呼翁の如きは、目に盲して心に盲せず、目を以て治めずして、而して心を以て之を治むるものと謂ふべきなり。その子武修、翁の講談する所を錄して、以て上梓するもの既に兩次、頃者又その三篇を錄して、以て緒言を先人に請はんと欲せり。而して先人忽ち世を辭す。今や刻成る。乃ち之を余に請ふ。予已むを得ずして、略爲に先人に聞く所の旨を書し、以て之が序と爲す。

天保九年戊戌春正月

平安　薩堆天放　撰並書

徳軒先生京都の儒者である。手島堵庵の門人で、石門の心學を以つて鳴つた人。名は敬德。天保七年歿す、年五十七。

思の官心の役目のこと。心のこと。

不思ハ官眼耳鼻舌觸の五官のこと。

薩堆天放　ばうつたてんうよむ。徳軒の子である。

心學道の話　序

洪水先生、名は在中。氏は奥田、俗稱は壽太、藝陽の人なり。洪水先生に賴杖先生に親炙して石門の瀧奥を極め、四方に遊んで道を說くこと數歲。天保己亥の年、東都に來りて講を參前社に闢く。予與り聞くことを得たり。朝夕傍に在りて、其の人を導くを視るに、能く機に從つて應ずることの縱横自在なる、譬へば鳥の空を飛ぶが如く、月の水に印するが如く、開合淺深、超然として其の跡の尋ねべきなく、聽者をしてよく言に因つて以て言を忘れ、迹滯らずして其の指歸を得しむ。實に海内の一人なりといふべし。予道話を聞くに隨つて筆記せしもの、半歲にして積んで五十卷に及べり。仍つて私にその書を名けて、如是我聞といひ、人に授けて敎導を弘くするの助とす。頃日京師の社中、之を見て以て竊に刊行せんことを謀る、刻既に成す、文化十四年卒す、年七十。

手島堵庵の子に出でし外戚の家業を襲ぐ。學に精通して心を受け、賢に聖を解し、語を洪水の著はす。正揚字を水といひ、その子孫代々心學を傳へて、石門と稱す。何世

るに及んで先生に告ぐ。先生咲つて曰く、此の如き、これ一時機の説話、何ぞ之を不朽に傳ふべけんや。然りといへども事已に成つて後に予に告ぐ。今に至つては止むるに由なし。只、如是我聞の名、大にその分に超えたり。宜しく心學道の話などゝ題して可ならんとて許されき。嗟嘆予固より鈍筆短才、先生才辯の譚論に於ては、之を錄するに遺漏なきこと能はず。語路の顚倒も亦多かるべし。世の此の編を讀むもの、官しくこれを以て先生を咎むることなかるべし。予今玆偶々京師に客たり。同社の人、予が一言を徵して筆記の證と爲さんことを頻りに乞うて止まず。因つて辭することを能はずして、その由を卷端に述ぶること爾り。

天保壬寅年冬於洛東觀行舍之旅寓

平野橘翁重飲謹識

平野橘翁

江戸の心學者槿園と道義を研究し、堀講慣行舍に藥慶憲元年心學孝行の一種の書を著す。又、公にし百席道話を著す。

序

『子曰く、性相近し。習へば相遠し』と、夫れ人の氣質美惡同じからずと雖も、孩提の時より父母を慕ひ、長ずるに隨うて兄を敬ふ心の如き、初より相遠からず。然るに善に習うて成長するもあり、惡に習うて成長するもあり。その惡習を變化して善に移すは敎なり。玆に藝陽奥田翁、壯歳より篤く聖學に志し、梅巖先生の遺敎を奉じ、遂にその蘊奥を極め、道を諸邦に唱ふる事年あり。卑近の俚言を借りて、孝弟の眞意を示し、古今の事實を述べて、忠信の大義をあらはす。故に群集するもの、皆感奮興起して惡習を變化して善にうつるもの亦少からず。かの性相近也といへる格言も、こゝに於て益々明かなれば、我が石門に功あることあけていふべけんや。翁一とせ、東武遊説の時、平野某傍に在りて、その道話を筆錄し、頃日

上河明はうへかはあきら。洪水の子なり。

梓に彫りて世に公にせんことを謀り、序を余に求む。余後生不學也といへども、此の書の成るを喜び、需に應じて筆を執ることしかり。

天保癸卯之春　　上河明識

精神修養 道話の泉

目次

鳩翁道話目次

第之上

仁は人の心なり……一
今大路先生のはくらんの藥……二
心學道話の必要なる所以……二
仁は無理のないこと……三
仁の丸無垢……四
扇と見臺の用ひ處……四
仁と本心……五
鳴瀧の夜の嵐の歌……五
我が本心を師匠とする……六
義は人の路なり……七
中澤先生の御教諭……八
娘に按摩の稽古……九
琴三味線の稽古……一〇
四つの袖の端唄……一一
京の蛙と大阪の蛙……一三
手はつけごの俳句……一四
一の谷の戰……一五
辨慶の大松明……一五
土佐踊りして奢る……一七
螺螺の自慢……一七

はしなうて雲のそらへはの歌……一九

壹之下

鶏犬と放心……二一
一人息子の不孝もの……二三
不孝ものを勘當相談……二四
德本上人の歌……二六
不孝ものが勘當相談を立聞きする……二八
勘當相談の親の愁嘆……二九
人の親の心はやみにの歌……三〇
勘當の中止……三二

貳之下

無名の指……四〇
かたちこそ深山がくれの歌……四四
子に迷ふ親の心をの歌……三四
不孝ものゝ悔悛……三五
何事のおはしますかはの歌……三五
とくさ刈るその原山の歌……三六
不孝もの相談の座へ乘出す……三六
不孝もの庄屋役となる……三八
母親臨終の遺言……三八
心の樂なは極樂……三九
おさんどんと丁稚の長吉……四五
軍太兵衛肩衣を正す……四六

長吉が飯蛸を盜み食ひする……四八
兩替屋が丁稚を敎へる……四九
本心の正銀を見覺える……五一
鹿ノ鳴く音を聞きに行く……五一
放蕩の悴を持つた親の泣きごと……五三

貳之上

心からよこしまに降るの歌……五七
日蓮上人身延山に隱る……五七
兩掛に竹杖一本の旅……五八
直ぐなれば重荷かけてもの歌……五八
大黑柱に蟲が入る……五八
三百石取りの次男の無分別……五九
山寺に身を寄する……六〇
わるいとは知りつゝの歌……六〇
店の番頭の不しだら……六三
親類緣者から金の無心で困る老人……五四
妻と母との折合はぬ愚痴……五四
人の泣きごとを聞きに來た鹿……五五
困窮の餘り惡計を畫す……六四
朝夕にたもつわが身はの歌……六四
心こそ心迷はすの歌……六六
石川五右衛門や熊坂長範……六七
あひ見ての後の心にの歌……六八
歌を見て悔悟する……六九
一字千金にあたる……七〇
掛香や松がね油の匂ひ……七一

手に取るな只野におけよの俳句……七四
樂がしたくば心をの歌……七四

參之上

拱把の桐梓……七六
身を養ふは心の養ひ……七八
つくづくと思へば悲しの歌……七八
嵐山邊の貸雪隱……七九
よい中も近ごろうるさくなりにけり
の歌……八〇
茶方の雪隱を建てる……八一
唐樣で貸雪隱一度八文……八三
得意廻りに出掛ける……八四
八貫文取り糞を五荷汲む……八四
人の雪隱に終日居つゞけ……八五
火事で狼狽へた八兵衞……七四
小人凡夫の腸の開帳……八六
雪隱の中で辨當遣ふ……八六
わが心鏡にうつるの歌……八七
繼子娘を殺さうとする……八八
後妻が男の子を生んだ……八八
娘は十七男子は三歳……八九
後妻が娘を井戸へ投げ込んだ……九〇
おく山の杉のむら立ちの歌……九一
かまど將軍で威張りたい……九二
やとはれて鬼になつたるの俳句……九三
あだちが原の黑塚……九四

參之下

年を經てうき世の橋をの歌……九五
五十年三十年のあとをふり返へる……九五
井戸の中の娘が救ひを求める……九五
氣絕した娘が蘇生する……九七
繼母の狼狽……九五
世の中をめぐり車のの歌……九七
こはい夢を見ましたといふ娘……九八
狐狸のしわざとした……九九
深山木のその梢ともの歌……九九
心の黑竈……一〇〇
繼母の惡事をいはぬ孝行娘……一〇〇
村中の評判に繼母の捕縛……一〇一
戀すてふ我が名ばまだきの歌……一〇一
了稚が九年甫を隱す……一〇二
繼母の白洲での白狀……一〇三
繼母の白狀にて娘の吟味……一〇四
繼母居村拂となる……一〇五
役人が落涙して娘を叱る……一〇五
世の中を四尺五寸との歌……一〇七
心學傳授の由來……一〇八

續鳩翁道話目次

壹之上

天の明命を顧る……一一
雨ならば宿も借るべきの歌……一一三
冷症の小ものの寢小便……一一三
馬小屋の二階から寢小便する……一一四
馬小屋の二階から落ちた小もの……一一四
あざみ草その身のはりをの歌……一一五
京の町から談義僧を招待した……一一六
破駕籠に乘つた談義僧……一一七
談義僧死人、科人、狂人と見られた……一一八
世の中は何もいはずにの歌……一一九
嫁入りした十七歳の娘の手紙……一二〇
雨にふし風になびけるの歌……一二一
大地震に竹藪へ逃込んだ……一二二
風のある年は瓜も小蔓が張る……一二三
左右の肩をぬぐ嫁入り娘……一二五
春の夜のやみはあやなしの歌……一二六
養子を幾度も取換る爺……一二六
自ら申込んで養子となつた青年……一二八
大工の障子をはめるを見た養子……一二八
養父母は家付の敷居鴨居……一二〇

壹之下

山川の末に流るゝの歌……一二一
土粥の製法……一二二
耕すや餒その中にあり……一二三
勢州江戸屋の乳母の苦心……一二四
江戸屋の衰微……一二四
乳母が主人の子橋彌を養ふ……一二四
乳母の大願金毘羅參り……一二五
乳母の親元……一二七
鏡を知らぬ夫婦つれ……一二九
鏡を見て妻の格氣……一二〇
妙琳尼の仲裁……一二〇
よしあしのうつる鏡のゝ歌……一二一
類母子講の金で家名相繼……一二一
橋彌十歳になつた……一二二
乳母その實子を江戸へ奉公に出す……一二三
主家の再興……一二四
木曾殿と齋藤實盛……一二四
鍋燒でなければ飯は食へぬ……一二五
手代が花見に出掛ける……一二五
實に百年目でござります……一二六
人の子も學べあしたにの歌……一二七
領主から乳母へ褒美……一二七
橋彌、博勞へ禮物……一二八
握り飯を馬に食はす……一二八
山鳥のほろ〳〵と鳴くの歌……一二九
橋彌と文五郎の伊勢參宮……一三〇

乳母が橋彌の初旅に物致へ……一五一
たらちねの親のまもりとの歌……一五一

貳之上

湯の盤の銘……一五三
心の掃除をする……一五六
二疊臺目の席……一五六
掃除に氣をくさらす主人……一五六
團扇へ水をつけて埃を取る……一五八
旦那ごのが氣が短い……一五八
小の月の大晦日生れ……一五九
女房が氣が短い……一五九
一家揃うて氣の長い家内……一六〇
いろ〳〵の鳴物で調子が取れる……一六一
目くらと聾と躄……一六一
みな人の元の心はの歌……一五二
衣類の洗濯と心の洗濯……一六二
堯舜と湯武……一六四
本心を炭團玉にしかへる……一六五
捨て育てに育てゝは人にならぬ……一六五
教は時を知るが肝要……一六七
婚禮振舞の席……一六七
年寄が金米糖をつかむ……一六七
景清と箕尾谷が鍛鬼……一六八
司馬温公となつて壺を破る……一六九
座敷中の金米糖……一六九
攫んだら放すまいとする……一七〇
身代の壺を破らぬ用心……一七一
火の消えた提灯をさげた目くら……一七一

貳之下

何事も則を越え行くの歌……一七三
國々の關所と心の關所……一七三
六根、心識、阿賴耶識……一七四
東海道、木曾街道の關所……一七六
神田邊の貧乏な大根賣……一七五
本所の屋敷町で銅盥を盗む……一七八
天竺の獵人、藕で猿を捕る……一八一
竊盗の露顯……一八四
おれは目くらではない……一七二
家へ歸つた大根屋の改悛……一八七
鳴子をば己が羽風にの歌……一八七
洛東清水寺の繪馬……一八八
普門品の功德……一八九
華陀流の醫者、目の玉を取換へる……一八九
片方に狗の目の玉を入れる……一九一
ふりにける奈良の都の〻歌……一九二

參之上

邦畿千里惟れ民の止まる所……一九三
きよろりとは如何なるものかの歌……一九四

長吉の返事、ハイ、オイ……一九五
三十も赤子、五十も赤子、八十も赤子……一九六
我が立てねば悪事はの歌……一九六
額を忘れ歯を忘れる……一九七
楊弓を引く人……一九七
近道はトント當にならぬ……一九九
旅人野雪隠に入る……一九九
雪隠へ握飯を落した……二〇〇
近道は役に立たぬ……二〇一
急がずば濡れざらましをの歌……二〇一
我なしの場所に止まる……二〇一
極樂で木耳と數の子を見る……二〇四
身體は地獄へ舌や耳は極樂へ……二〇五
堯舜の御代は家業に精出した……二〇五
家相方角は心を正うしてから見る……二〇七
假面を造る人……二〇七
水鳥の行くも歸るもの歌……二〇九
至善は何も覺えぬ我なしの生粹だ……二一〇
越前大野郡の孝子次左衛門……二一一
霙の中を蓑笠も着ぬ孝子……二一三
父が馬といへば馬といふ……二一五
父が破盃と破印籠を買つて來る……二一六
次左衛門青田を刈る……二一七
父に月代を剃つて貰ふ……二一八
領主より褒美を貰ふ……二二一
領主老人をいたはる……二二二
次左衛年を隠す……二二二
不孝の息子鶏を飼ふ……二二四
ペッカッコウと鳴いた雞……二二六
よしと見るその一ふしをの歌……二二七

續々鳩翁道話目次

壹之上

中庸の性、道、教……二三八
元亨利貞は天の四德……二三九
本心は仁義禮智信を具ふ……二三〇
やみがたきよしあればこその歌……二三一
氣の清濁と氣質の相違……二三二
中庸の取違ひする人……二三三
子莫の中……二三四
天命は新らしい煙管……二三五
煙草も天の一物、人も天の一物……二三五
人欲の固まつて天理を失ふ人……二三八
煙草さへ心のやにをの歌……二三九
親父樣のことをさら煙管と申す……二三九
忠孝の人は兎角邊鄙に多い……二四一
ほとゝぎす自由自在にの歌……二四一
醫者どの〻不自由な里の〻俳句……二四二
學問して癖付を直す……二四三
煙草好きの二老爺……二四三
煙草に攻められて逃け出す京男……二四五
日高川を渡つて道成寺に隱れる……二四五
追つ掛けて來た老爺……二四七

人毎に一つの癖はあるの歌……二四八

壹之下

僞りのなき世なりけりの歌……二四九
誠の說明……二四九
わが性の人に隱れての歌……二五〇
人心、道心、私心、天心……二五一
稻荷山の松茸と丹波の松茸……二五二
松茸を食べるに柚を用ふ……二五三
播州林田領の卯右衛門……二五五
本願寺講師の說教に卯右衛門の發心……二五六
さへられぬ光りのあるをの歌……二五七
佛法と藥屋の雨の俚諺……二五八
雨あられ雪や氷ごの歌……二五九
法華は佛になれぬ……二五九
法華宗は算盤にかゝらぬ……二五九
男山、劍菱、諸白、並酒……二六〇
卯右衛門の堪忍、嫁の邪見を敎化す……二六二
妻の難產に金比羅樣へ立願をかけた男……二六六
銘々ごもゝ神佛をだます……二六六
卯右衛門をだました馬士……二六七
雪の夜に馬士の門に寢た卯右衛門……二六九
馬士、悔悟して信者となる……二七〇
火の中をわけても法をの歌……二七〇

貳之上

道は須臾、離るべからず……二七二
藤樹先生の語……二七二
子も踏まず枕も踏まずの俳句……二七三
目くらが火事に逢ふ……二七五
橋の飾穴から杖が落して見る隱居……二七六
粥の煮え加減を試みる賢婦人……二七八
岩根ふみ枳殼わけての歌……二七九
蟹を見て氣の付くの俳句……二七九
米麥等の種を取扱ふ農……二八〇

貳之下

隱れたるより見はるゝはなし……二八二
蚤程の煙草い火から大火事……二八三
粃種といへども天地生々の活物……二八三
無暗に家業を換へるはわるい……二八四
本尊を幾度も換へた和尚……二八五
怠りも夏の稼ぎもの歌……二八七
炎天の一番草二番草取り……二八八
辨慶の茶碗、樊噲の楯、清正の
香合……二九〇
たんと家を踏潰して來た道具……二九〇
檜の木の長扮屋と天狗樣……二九四
世界中へ筒抜けになる……二九五

二百兩の爲替を盜んだ手代……二九六
迷ひ犬を訓戒した町年寄……二九八
生ひ茂る森の宿の〻歌……三〇一
手代の芝居見物……三〇二
敵討、綴れの錦の狂言……三〇二
一と時雨しぐれての俳句……三〇三

參之上

性と情とは水と波……三一一
玉の名目爭ひする儒と僧侶と神主……三一四
明德の玉、兩面不背の玉、曲玉……三一六
踏み碎く氷の下にの俳句……三一六
柿の木には柿、桃の木には桃……三一七
長門の萩の百姓關藏……三一九
顛子伊八の不行跡……三一九
實體息子の芝居見物……三〇五
柳下恵と盜跖……三〇六
芝居を見て感悟した手代主家へ
歸る……三〇八
手代の改悛……三一〇
その腹に何が不足ぞの俳句……三一〇
伊八の妻お石の孝貞……三一〇
出來のわるい內儀、半分は垢で
ございます……三一二
鹿島のことふれ山の神の御託宣……三一四
親里ではお石を引取る相談……三一四
歸をとつぐといふ……三一六
伊八の炮烙船の難破……三一八

伊八の行狀は天命に背く……三三九

參之下

天地位し萬物育はる……三三〇
あすも亦朝疾く起きての歌……三三一
お石の勘當……三三二
お石の品行……三三四
汲みて知れ心の底のゝ歌……三三五
お石村役人に願出る……三三六
お石の歸りの遲い爲舅姑の心配……三三七
お石寢物語の述懷……三三八
われが身に秋風寒しの俳句……三三九
法談の席へ舅姑を負うて行く……三四二
講師お石の行狀を感ず……三四三
本山よりお石へ下され物……三四四
お石の行狀大守の耳に達す……三四四
柳井氏お石の行狀を上申す……三四五
村人伊八を尋出す……三四六
伊八の歸國とお石の表彰……三四七
諸方の紳士お石を訪問す……三四八
立ちよりて暫しなりともの歌……三四八
行燈を知らぬ下女……三四八
朱文公觀書の詩……三五〇

心學道の話目次

初篇

前席

學んで時に之を習ふの說明……三五一
雞は時を告げ犬は門を守る……三五二
柳は綠花は紅……三五三
中々に畜生ならば萬物のゝ歌……三五四
世の中に花ち紅葉も金銀もの歌……三五四
萬物皆我に備はる……三五四
神佛を拜むに兩手を合はす……三五五
祈りして驗なきこそ驗なれの歌……三五六
如來樣へ供へる御飯をお鉢とい
ふ人……三五六
假りの世を假りの世ぢやとて仇
にすなの歌……三五七
寺の奉加や寄進事ばかり苦勞す
る人……三五九
如來樣の御飯の米を摺子木で洗
ふ人……三五九
方便を一ぱい空也上人のゝ歌……三六〇
南無阿彌陀彌陀の御名とぞの歌……三六一
念佛宗や日蓮宗のとなへ言……三六一
學ぶの說明……三六二

五臓の神君、性、誠、明徳……三六四
谷神、玄の又玄……三六四
大道廢れて仁義興る……三六五
江戸の神田の相生町の參前舍……三六五
天地の開けぬ先に歌ふらんの歌……三六五
眞似をせよ主人に忠義親に孝の歌　三六七
何見ても何を聞いてもありがた
やの歌……三六九

後席

朋あり遠方より來るの説明……三八二
同氣相求め同類相集る……三八三
世の中はよい茶よい酒菜一つの歌　三八四
只居り三年の惑ひ……三八四
うか〳〵とあだに月日を送る人
目、喉、睫、鼻等の效用……三六九
阿房な長吉……三七三
此の世に何をして生れたのか……三七四
若盛りやよいづ方へ行きにけん
の歌……三七五
長吉日本橋で買食する……三七六
和論語の説……三七九
の歌……三八〇
飽食煖衣逸居して教なきは……三八五
秋來れば垣根にすだく虫の音の
〻歌……三八八
本心を知るこ死なぬものぢや……三八七

一粒の米も龜末にはならぬ……三八九
神代とは古りし昔のことならず
の歌……三九一
正宗の名刀を拜見する……三九二
新角の名刀も錆びては役に立たぬ　三九五
山椒太夫や斧九太夫のこと……三九六
佛にも神にも人はなるものをの歌　三九七
子供の手習にいたづらを書くもの　三九八
三助も夜遊びして歸る時は胸が
どき〳〵する……四〇〇
世の中の人は知ねど科あればの歌　四〇一
有爲法、無爲法……四〇二
人知らぬ虎の尾草やの俳句……四〇三

第二篇

前席

間男をせぬを女房はの俳句……四〇三
長吉が隣りの長松への口舌……四〇五
河北某の子道悅の放蕩……四〇六
道悅心學の道話を聞いて改心す……四〇九
子を思ふ親の重荷の〻歌……四一一
四手駕籠かくありがたきの歌……四一三
一聲も時鳥よりの歌……四一四
道悅領王より褒美を貰ふ……四一六
道悅心學の有りがたさを朋友に
語る……四一七
長閑さよ願なき身の〻俳句……四一八
さわがしや願ある身の〻俳句……四一九

坤道はそれ順か……四二〇
霜枯と見しも恵みの〻歌……四二
去るといふ夫に嗅はの歌……四三
夫婦は天地の雛形……四三四
縫物に針に糸をつける……四三五
亭主が針で女房は糸……四三七
煙管と羅宇……四三八
尉は山へ柴刈に……四三九
菅原道眞御伽噺を作る……四三〇
諸册二神の閨門支配……四三一

前席の續き

民草の夏の稼ぎの〻歌……四四〇
心は陽で天、身體は陰で地……四四一
かばかりのことは浮世の〻歌……四四二
あい〳〵の返事一つでの歌……四四三
十月を神無月といふこと……四四四
貧乏神を追拂ふ相談……四四五
いつぱりのある世なりけりの歌……四四五
貧乏神澁團扇を持つ……四四六
福の神のこと……四四六
貧乏神の返歌……四四七
朝寢して家業ぎらひの〻歌……四四七
折々はよそへも行きやれの歌……四四八
今更にあいたいぢやとの歌……四四九
主殺し親殺し夫殺しの三刑……四四三
池水に始の程は降り消えての歌……四四四
親御が長松と呼ぶ時の返事……四四六
天地の上下をひつくり返へした
不孝もの……四四六
親が何といつても腹を立てるな……四四八
芋を見よ子は榮えよとの歌……四四九

後席

小さい事から大きうなる……四五四
あやまりに影を我ぞとの歌……四五五
石川五右衛門、日本左衛門……四五五
恐ろしき氷の角もの俳句……四五六
闇の夜に提灯持つて行くと浮足
備後三次郡の小百姓清右衛門……四四九
清右衛門父母の言付けで草鞋と
下駄を穿く……四五一
清右衛門褒狀を受く……四五二

後席の續き

扇屋の花扇……四六二
五人の御客が花扇に談判にかゝる……四六六
くない……四五六
猩々緋といふもの……四五七
猩々を捕る酒を置くこと……四五七
猩々酒を飲んで踊り出す……四六〇
客に指を切つて起請を書く花扇……四六一
贋指を切つた花扇の述懷……四六六

木曾路で狐の子の死んだのを見た……四七〇
犬などの畜生には生靈死靈はない……四七〇
道を知らねば萬物の糞糟ぢや……四七一
小百姓の嫁が姑を殺したこと……四七一

第三篇

己に克つて禮に復る……四八二
可愛い心は世界一面に貫いたもの……四八四
人は天の生々の理を以て心とする……四八五
一休和尚遷化の時の言分……四八六
死にともないと一休の遺言……四八六
心が二つにも三つにも分れる……四八六
松蔭のうつるも月のゝ俳句……四八九
本心と私心と組討する……四九〇
本心は親類の病氣見舞に私心は
夫婦喧嘩の元は……四七三
嫁と姑との口論……四七六
田植から歸つて來て目の見えぬ
姑を殺した嫁が遂に召捕られた……四七九
止めにする……四九〇
人心の同じからざるはその面の
如し……四一
短氣な仕事師と托鉢の坊樣……四九二
我が身だに我がまゝならぬの歌……四九四
今日からお前の頭を臘梨に致し
ます……四九四
梅干のやうな婆樣もの歌……四九五
我は世界の影法師……四九六

生るゝも死ぬるもの歌……四九六
見るも聞くも言ふも動くもの歌……四九七
我こそ世界と一つになる……四九七
白隱和尚の敎へ「らしうせよ」……四九七
長吉の返事はハイといひオイと
いふ……四九八
おほゝゝの愛嬌ある言葉づかひ……四九九
我なしの德ほど廣大なありがた
いものはない……五〇一
萬法は是れ無分別……五〇三
適もなし莫もなし義と與に比ふ……五〇四
鐵砲の藥でやけどした人……五〇四
殿の御寶藏を預る三人……五〇五
三人の役人の眞似して目鏡をか
けた大馬鹿男……五〇六
膽が潰れた氣味合ひが分りました……五〇八
本心の眼を開いて小さい眼鏡を
外すがよい……五〇九
扇に指をさして西東南北から敎
へる……五一〇
たつた一の無我の大道……五一〇
同じことでも言樣で名がちがふ……五一一
辨阿といふ趁跛男……五一一
右の足が長い左の足が短い……五一三
本心を知らぬは辨阿の仲間……五一三
己といふものを打殺す修行する……五一六
百戰百勝一忍に如かず……五一六
婆婆世界とは堪忍世界のこと……五一七

後席

顏淵曰く請ふその目を問はん……五一八
身勝手の心に克つ……五一九
舜が禹に位を讓る時の仰せ……五二〇
我に勝ち身方に勝ちての歌……五二〇
東照宮の五字七字の誡……五二一
上を見な身の程を知れ……五二一
家康の誡、我は戰國に生れたれば手と賴む垣ひき倒すの歌……五二二
手折らるゝ袖にかをるやの俳句……五二二
神君の御仁心、天下泰平……五二三
負けることをば嫌はるけながの歌……五二三
負けて勝つ智惠の力はの歌……五二三
鼠どもが怨敵退散の祈を觀音樣にかける……五二四
緣の下から墓が出て來て問答する……五二四
俄に猫を飼はれて鼠一族の難儀……五二五
墓が鼠にその身についた牙を取れと敎へる……五二六
墓の身だしなみ、鼠を訓誡す……五二〇
世界は墓の樣な心掛になれば安全……五二一
御法度の銀の簪や櫛などを隱してさす女中ども……二三一
長吉の買食、錢箱さがし……五二三
金に命を取られ酒に命を取られる人……五二四
千兩富に通をぬかす貧乏人……五二四

定まりて山姥といふものゝ歌……五二五
指で丸い輪をして見せると金だといふ人……五二六
元日の烏が長閑に鳴く……五二六
病人のある時は烏鳴が惡く聞える……五二七
非禮戒ることなかれ……五二八
道倫禪師……五二九

第四篇

前席

飽食煖衣逸居して敎なければの章……五五二
扇と要との比喩……五五三
中澤道輔に性惡の議論した人……五五五
犬と猫に孝悌忠信を敎へて見よ……五五八
諸惡莫作衆善奉行……五二二
七種や口ほどに手のゝ俳句……五四〇
道二翁が藤村某の次女を嫁に世話した話……五四一
嫁に行つたら堪忍を第一とせよ……五四六
藤村某の次女能く歸いだ家を治む……五五〇
衣食住の三つに身を助けられる……五六〇
道を知らぬものは畜生よりも劣る……五六一
烏が柿の實を取るを人が叱るは無理……五六二

畜生は夏冬なしの毛衣一枚……五六四
人は分限相應の家造りをしてゐる五六四
我が性を知れ本心を知れ……五六六
性の善惡についての論……五六七
かへし見よ己が心の〻歌……五六八
格物致知の手引に由れ……五六九
三界に須彌も四州もの歌……五七〇
都卒ぢやの空寂ぢやの八識ぢや
の九識ぢやの……五七〇
垢をおとす糠袋には糠の粕が殘る五七一
正眞に六根の底が拔ける……五七二
一天四海皆歸妙法光明遍照十方
世界……五七三
月かげの到らぬ里はの歌……五七四
押領使が大根に命を助けられた…五七四

徒然草文中の解釋……五七六
我等には日に三度四度ほど飢と
いふ大敵が來る……五八二
米麥豆などの五穀が我等の身代
りになる……五八二
大根は野菜の惣大將……五八三
冬向は鶴雁などの鳥が私等が身
代り……五八四
二番に押寄せるかたきは凍えと
いふもの……五八四
世に着せて裸で暮らすの歌……五八五
三番のかたきは雨露雪霜ぢや……五八五
天地の中に生えたるの歌……五八六
家の中の一本の柱でも我等を助
けてゐる……五八六
親鸞上人の摺子木の贄の歌……五八七
阿彌陀の光明が十方世界を照らす五八八

後席

人は一切のもの〻命を勝手次第
に取りつくす……五九三
人倫の說明……五九五
會參山に薪伐りに行つて親を愚ふ五九六
雲井より芦間に通ふの歌……五九六
君臣義あり……五九六
陶淵明我が子に一力を遣はす……五九七
心せよ使ふも人の〻歌……五九八
家來は三代相恩……五九八
佐藤嗣信と四十七士……六〇〇
天津空曇りなきまでの歌……六〇〇
桃の葉賣りと魚賣りとの口論……五九〇
世界萬物作り取りの押領使……五九二
夫婦別ありの解釋……六〇〇
行き通ふ山田守る男その歌……六〇三
火を以て水を制す……六〇三
內儀が惡くて流行らぬ醫者の話…六〇四
長幼序ありの解釋……六〇六
春毎に梅よりつぎての歌……六〇七
兄弟は同胞……六〇八
兄弟は他人の始めの說明……六〇九
頭は上で貴いもの……六一一
頭と足と一致して働く……六一三
手足は頭の下知を背かない……六一四

萬殊にして一本一本にして萬殊…… 六一五
芦間より友よぶ聲のゝ歌…… 六一六
木の實をば猿に食はせての歌…… 六一七
人を渡す渡守は自分も渡る…… 六一八
人を呪詛へば穴二つ…… 六一八

第五篇

前席

季路鬼神に事へんことを問ふの
説明…… 六一八
神子よせ神おろし…… 六二〇
嘘の難産に金比羅様をだます男…… 六二一
道話の後で讀聞かす高札の文句…… 六二三
神と佛と根本はちがはぬ…… 六二五

乞食が子を折檻する話…… 六二〇
饅頭を盗んだ子…… 六二〇
天命の乞食…… 六二四
形は乞食でも心は君子大人…… 六二五
乞食根性で不忠不孝になる…… 六二六
質金銀を拾へた奴…… 六二五
護摩堂で浴油の法を勤める…… 六二六
六根清淨の祓の詞の文句…… 六二七
祭禮に山や鉾や樂事を出す…… 六二八
人の歡びは神の喜び…… 六二九
佛へ手向けるものも人の見る方
主とする…… 六四〇
神佛は世界中の人の親…… 六四一
親御は現在の活神活佛…… 六四二
家來や女房の活きた神佛は主人
や亭主…… 六四三
本知大智大圓鏡智妙觀察智…… 六四五
智惠と才との區別論…… 六四五
定九郎が與一兵衛を殺す芝居…… 六四八
寺岡平右衛門が大石由良之助へ
御供を願ふ芝居…… 六五〇
芝居を見て涙を流すのは如何な
るわけか…… 六五一
泣きはせで泣顔するはの歌…… 六五一
池水の庭にも清きの歌…… 六五二
沖漠無朕萬象森然…… 六五二
氣の強い人氣の弱い人…… 六五二
石川五右衛門熊坂長範由井正雪
のこと…… 七五四
智惠の旦那と才の家來…… 六五五
智惠あると思へる智惠にの歌…… 六五七
小賢い大馬鹿と小馬鹿の大賢い
のと…… 六五六
禪學して借金取りが恐くなくつ
たつた…… 六五八
胴が据つたぢやない横着になつ
たのぢや…… 六九
恐ろしき鞍馬愛宕のゝ歌…… 六六〇
天狗の説明小天狗が脊中に羽を
生して居る…… 六六三
鞍馬の僧正坊嚴島の三鬼坊…… 六六四

大天狗は大徳……六六五
才といふものは浮足いものだ……六六七
若ものゝ茶屋遊び……六六七

後席

敢て死を問ふの説明……六七〇
皆人の知り顔にしての歌……六七二
死んだ後のことよりも現在のこ
とを知れ……六七三
生死一理……六七四
過去現在未來の説明……六七一
陰陽五行の氣……六七六
地水火風空と梵字……六七八
一見卒都婆永離三惡道……六七八
天と我と空と此の身の關係……六七九

世の中が二尺五寸にの歌……六八〇
けれどもと一足づゝはの歌……六八〇
生老病死の説明……六八〇
いつか又世に出んことはの歌……六八二
雜巾の生老病死……六八二
鐘の音の生死病死……六八三
釋迦如來の四句の文……六八四
醉狂の子息の禁酒……六八五
牛涯禁酒の張札……六八六
二十歳で死ぬ人は二十年賦の命……六八八
露の身といふも中々の歌……六九〇
聞くたびに餘所のあはれとの歌……六九〇
悟りとは障子の引手の歌……六九一
熟睡した時には私心人欲はない……六九四
敝れたる襤褸を衣る……六九六
豆腐の滓の笊を頭に載せた子供
の問答……六九七

第六篇

命にあらざることなし順にして
その正を受く……七一三
小人凡夫の天命の解釋……七一三
車胤孫康の螢雪……七一五
世界には活きた主宰様がある……七一七
物の名も所によつての歌……七一九
名に迷ふ人の心のゝ歌……七一九
お萩と牡丹餅の説……七一九
今日はおれの着物の洗濯だ……七二〇
南無釋迦ちや娑婆ぢやの歌……七二五
世の中に寢た程樂はの歌……七二五
一休和尚へ地獄極樂の質問……七二八
一休和尚武士を罵る……七二九
南天燭は楠のやうな大木になれぬ七三
蘭や萬年青と煙草の葉の運命……七三
菅丞相筑紫へ左遷……七三四
わが役は心に入らぬ役の歌……七三四
百萬石の大名に生れた運命……七三五
命を知るものほ巖牆の下に立たず七三八
孔子魯の城門の崩れ垣の下を通
つた時の言葉……七三九

何萬兩にも替へられぬ大切な體……七三一
道と命とは元來一つだ……七三二
楠正成湊川戰死の時の遺言狀……七三三
燒野の雉子夜の鶴……七三三
伊勢參宮に道伴れを誘ふやうな
もの……七三五
一家の繁昌と衰滅……七三六
米藏の人足が不思議に命を助か
つた……七三九
貧富盛衰は生れ合ひ……七四二
人の長命も道があつてからのこと　七四二
今年三十歳になる人はモウ一萬
六百五十日は引いて居る……七四三
佛壇と雪隱との幸不幸……七四五
薯蕷　鰻に茄子の屑が泥鰌になる　七五一
龜井戸の天神の放龜……七五二
手も出さず頭も出さずの歌……七五二
蜘蛛が膜を張るを見よ……七五四
手代が奉公に來た時を忘れる……七五六
今の手代には家もないに女房子
の出來るものもある……七五七
後生願ひの今生惡る……七六〇
桎梏して死するもの……七六〇
入れまじと飾りし手がねの歌……七六一
早繩のかゝる惠みのゝ歌……七六二
蛤同行……七六三
茶屋に賣出された蛤……七六四
密夫した女引廻はしの刑になつ
た時の泣言……七六六
モモンヂイが出るぞ……七七〇

とゝさんの足は棒になつたか……七七一
佛法の三世因果……七七一
夢窓國師後醍醐天皇へ御答へ……七七四
君よ聞け佛と說きしの歌……七七四
劍難の相あるもの殿樣に說伏せ
らる……七七四
大阪の順慶町の小間物屋忠兵衛……七七六

第七篇

萬物皆我に備はる……八〇〇
人は一個の小天地、天地の雛形……八〇〇
產むことは極り定まると申すこと……八〇一
子丑寅卯等の說明……八〇一
天地の開いたことは道開きをした
こと……八〇二
忠兵衛の後妻、繼子初之助を虐
待す……七七七
恐ろしき鬼の姿をの歌……七八一
後妻の子豐次郎實母を殺す……七九一
塗物師伊三郎召捕らる……七九四
伊三郎の牢死豐次郎の白首……七九八
諸冊二尊が天照太神を生み給ひ
しこと……八〇三
一番目に月讀命を生む……八〇三
三番目に蛭子尊を生む……八〇三
今上皇帝は日天子……八〇四
かけまくもむすぶの神のゝ歌……八〇四

闕白は月讀尊……八〇四
關白から天子を貰ふ……八〇五
蛭子尊と星のことだ……八〇六
東西南北何が初めか……八〇七
我が體は一切萬物の影法師……八〇七
兎角を求むるが如し……八〇九
身をつみて人のいたさはの歌……八一〇
よろづ我が元の心に歌……八一〇
爺が婆の顏の皺を見て笑ふ……八一一
孝子傳は親の見るものでない……八一三

後席

善に善報あり惡に惡報あり……八一七
汝に出でたるものは汝に歸る……八一九
天道樣の算用に分厘毛忽も間違
をしやほしやと思はぬの歌……八一三
細川越中守の足輕の正直……八一四
買つて來た佛像の中から三十兩
出た……八一四
賣主を尋ねて金を返す……八一七
賣主の老婆の物語……八一〇
老婆足輕に井戸の茶碗を贈る……八二一
茶碗から老婆の家筋が分る……八二四
屋根屋と井戸屋……八二五
おれが智惠おれが體おれが働く……八二六
はない……八三一
地藏菩薩と唱へるもの……八三三
虛空藏は形がない……八三三

伊勢國關の地藏……八三四
一休和尚が小便で開眼をした……八三七
娘を嫁にやると舅姑の年を聞く親……八三九
猿のやうに後綏を付けて引張る親……八四一
横さまに這へと教へたの歌……八四三
横さまに親は這へどもの歌……八四四
永代橋が落ちて人死が多い……八四四

第八篇

漢の昭烈後主に遺言す……八五八
吉野川その川上をの歌……八六〇
流れては海となるべきの歌……八六〇
韓信股をくゞる……八六〇
大海の水も元は小流の集り……八六一
かばかりのことは浮世のよ歌……八六三
親の眼病の爲に妹を遊女に賣つた姉……八四六
永代橋から投身する女を救つた男……八四九
惠まれた金で親の眼病がなほる……八五一
三年目に助けられた男に逢ふ女……八五三
助けた所は永代橋助かつた所も
永代橋……八五六
煙草の吸殼は火事ぢやない……八六三
我よしと思ふ心ぞの歌……八六五
痰醫者といふがあつた……八六五
手後れといふ痰醫者……八六六
石川五右衛門の淨瑠璃……八六七
盜人の初めは嘘から起る……八六八

鬚が竹の子を盗む話……八六九
愼みは朝夕なるゝの歌……八七一
夫婦の應答の如何によつて喧嘩が起る……八七一
假初の言の葉草にの歌……八七三
家内中なかのよいのがの歌……八七三
三寸の舌で五尺のゝ歌……八七三
定家卿子息の言葉の多きを戒む……八七四
知らぬこと知つた顔しての歌……八七五
亭主を喪つた女房棺桶に向つて歌をよむ……八七六
長かれと思ふ命はの歌……八七七
長かれと思ふ寢莫座はの歌……八七九
親の足を切りたがる長松……八七九
扇の左右上下を指す……八八〇
念佛無間禪天魔眞言亡國……八八一
車力の權八の妻……八八二
權八妻を追出さうとする……八八三
むつゝして戻れば庭にの俳句……八八五
顏くせを常にたしなめの歌……八八六
兩方の山高くしての歌……八八六
天照太神天の岩戸に隱れ給ふ……八八六
貪欲と愚痴と酒とにの歌……八八七
燒もちを燒かねど顏がの歌……八八九
有りがたや姿笑うての歌……八九一
權八遂に妻にあやまる……八九一
數萬石積み重ねたるの歌……八九三
住吉の社家が百兩の金をほしがる……八九四
御佛もさぞや御金をの歌……八九四
道輔先生社家を戒む……八九五
入江彌左衞門德本上人に質問す……八九七
迷うから地獄や餓鬼はの歌……八九八
ありさいふ人に地獄はの歌……八九九
道林禪師白樂天をあやぶむ……九〇〇
諸惡莫作衆善奉行……九〇一
孔子樂康子の墓のことを語る……九〇四
心は平等一枚……九〇二
赤子の時は惡さいふものはない……九〇四
おもかげの變らで年のゝ歌……九〇五
關寺小町……九〇五
蟷川新左衞門……九〇五
佛のかはらぬ時はの歌……九〇五
佛のかはらばかはれの歌……九〇五
生れるゝも死ぬるもの歌……九〇六
死ぬなら頓死がよい……九〇六
水に劍を落して舟端に刻む……九〇七

目次終

精神修養

道話の泉

堤達也校註

鳩翁道話

堤達也校註

『孟子曰く、仁は人の心なり。義は人の路なり。その道をすて、由らず、その心を放つて求むることを知らず哀しいかな。』是は孟子告子上に見えます本文でござります。扨此の仁と申すは、諸先生いろ〳〵に御註をなされたれども、むづかしう申しては、女中方や子供衆の耳へ入りにくい。それをたとへを以て御はなし申しませう。

むかし京に今大路何某といふ名醫がござつて、名高い御人ぢや。或時鞍馬口といふ處の人、霍亂の藥を製して賣廣めまするにつき、看板を今大路

鞍馬口　鞍馬山へ入る所の里の名。

先生に御願ひ申して書いてもらはれました。其の看板に、『はくらんの藥』と假名で御書きなされた。ソコデ頼んだ人がとがめました。「先生是はくわくらんの藥ではございませぬか。何ゆゑはくらんとはなされましたぞ」先生笑うて、「くらま口は、京へ出入の在口、往來は木こり山賤百姓ばかり、くわくらんと書いてはわからぬ。はくらんと書いてこそ通用はするなれ。眞實のことでも、わからぬ時は役に立たぬ。たゞひはくらんと書いても、藥さへ効能があればよいではないか」と仰せられました。いかさま是は面白いことでございます。

聖人の道もチンブンカンでは、女中や子供衆の耳には通ぜぬ。心學道話は識者のためにまうけましたことではございませぬ。たゞ家業におはれて隙のない御百姓や、町人衆へ聖人の道あることをしらせ申したいと、先師の志でございまするゆゑ、隨分詞をひらたうして譬を取り、或はおとし

有口（さいしよの入口になつて居る所のこと。）
木こり（木を伐る人、山のこと。薪取りなどのこと。）
山賤（山かせぎするものゝ稱。）
チンプンカン（物の分けの分らぬこと。）
先師（石田梅巖のこと。）

梅巖は丹波の人、心學を創唱す、京に住す、延享元年九月歿す、年六十。

輕口ばなし（もやみにべちやくちやすること。）
五倫（父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、兄弟序あり、朋友信あり、之を五倫といふ。）

話をいたして、理に近いことはなんでおはなし申します。かならず輕口ばなしのやうなこれは本意ではございねども、たゞ通じやすいやうに申すのでございます。

時に仁と申すことは、畢竟トント無理のないと申すことでございます。此の無理のないのが、即ち人の心ぢやと孟子は仰せられました。此の無理のない心をもつて、親に仕へまするこ孝行になり、主につかへまするこ忠になり、夫婦兄弟朋友の間も又々此の通りで、五倫の道はやすらかに調ひます。その無理のない仕樣は、親は親のあるべきやう、子は子のあるべきやう、夫は夫のあるべきやう、女房は女房のあるべきやう、此のあるべきやうが無理のない處で、即ち仁なり又人の心でございます。たとへて申さば、此の扇は誰が見ても扇ぢや、扇と知つて、これで鼻かむ人も、尻ぬぐふ人もない。これは是れ扇のあるべきやう、禮儀に御もちひなされるか、

見臺　書見臺の略、本を載せて見る臺。

仁の丸無垢　無垢とは、ぜ物のない生一本といふと、とゝは總體殘らず仁だといふこと。

店おろし　商家に陳列して店頭にたる貨物を悉く取りおろして調査すること。

開いて風をもとめる歟、この外に仕業はない。此の見臺もその通りで、棚のかはりにもならず、又枕の代りにもなりませぬ。やはり見臺は見臺のあるべきやうにおつかひなさる。しかれば親御さまを親御さまと御覽じたらば、御孝行になされるが、子たるものの有るべきやう、是が仁なり人の心でございます。かやうに申してゐるこ、よそのはなしのやうなれども、即ち御銘々さまの御心が、トント無理のない仁の丸無垢、いまあなた方の御心の店おろしをいたして居りまするのぢや。よそ事のやうに御聞きなされては迷惑に存じます。もしあなた方が、親御へ口ごたへをなされたり、また親を泣かせたり、主人に心配させたり、難儀をかけたり、夫に腹を立てさせたり、女房に心づかひをかけたり、弟をにくんだり、兄を侮つたり、世間へ難儀をかけちらすは、皆扇で尻をぬぐひ、見臺を枕にしてござるといふものぢや。御當所には左樣の人柄はござるまいけれども、天竺の横町には、

天竺の横町　廣い世間といふこと、遠方のこと。

我方　我が道といふこと。

吟味　詩歌を吟じ味ふことから、轉じて能くしらべえらぶことに用ふ。

此の連中がたんさある。御用心なさりませ。つくづく思うて見れば、意地のわるい生れつきでも、いたし方がござりませぬに、幸におたがひに無理のない心を以て生れましたは、千萬金にも替られぬ有がたい事ではござりませぬ歟。この無理のない心を我が方で本心と申します。尤も仁こ本心こ稱へ所によつて、すこしの差別はあれども、そんなことの吟味すると長うなる。唯本心は無理のないものこおぼしめして、間違はござりませぬ。今日各樣に御一人〳〵御目にかからいでも、おの〳〵さま方のお心に、すこしも無理はござりませぬと知れますゐその證據は、いふまじきことをいふか、すまじきここをするこ、忽ち腹の中が何とやら心わるく覺える。是れ無理のない心を以て無理をするゆゑ、心がねぢれで心わるいのでござります。是はこれ、千人萬人皆同じことでござります。古歌に

鳴瀧のよるの嵐にくだかれて

散る玉ごとにやどる月かげ

次してやすものでも云々。慣の安いもの物が多いがこれは安くて慣のあるものだといふこと。

中庸一卷子思の著也。

御證文證據になる文面といふこと。

これ月は一つなれども、ちる玉ごとに、各のかげをやどす天理の妙用、仁はひとつの仁なれども、萬人皆是を分けて持つて居まする。ソコデ世界中の人の心に無理のないこいふことが、チヤント勘定が出來まする。さるによつて、此の無理のない心にしたがうて物ごとをすれば、皆あるべきやうになつて、孝行仁義も自ら出來まする。ナントはやい學問ではござりませぬが。タツタ一つ合點すると、百年學問した人と、行に於て何もかはつたことはござりませぬ。ドウゾ本心に御したがひなされ、是を先生として御稽古をなさるがよろしうござります。我か本心を師匠にすれば御祝儀もいらず、暑寒の見舞にもおよばず、心やすう忠孝はつとまる、ありがたい教でござうます。しかしあまりやすいと得ておうたがひの起るものぢや。決してやすものでも御買ひかぶりの氣づかひのあるのではござりませぬ。押切

道猶大路也、孟子にある、人の行つてゆく道は丁度通行する大路のやうなものだとの意である。

つけもない。とんでもないさいふに同じ。

つて本心におしたがひなされるがよろしうござります。中庸には、『性に率ふ之を道といふと屹度御證文の請合がござります。御氣づかひなしに御つとめなされませ。』

扨『義は人の路なり』とは義といふは、無理をせぬことなり。無理をせねば、人交りは申すにおよばず、萬物と交つてよろし。かるがゆゑに、古人『義は宜なり』と仰せられました。家來としては、奉公に精を出すがよろしい。嫁としては、舅姑に孝行にし、夫を大切にするがよろしいぢやござりませぬか。その外何事でも宜しいのが義でござりますた。その宜しいのが人の道ぢや。道とは古人曰く、『道は猶ほ大路の如し』と、江戸へ行くも長崎へゆくも表へ出るもうらへ出るも、となりへゆくも、雪隱へはいるも、皆それ〴〵に道がある。もし道をゆかぬと、屋根こしをしたり、溝へはまつたり、野こし、山こし、こつけもない所へうろたへまゝる。是れと同じ

ここで、人の上でも宜しうないことをするこ、道ではござりませぬ。子は親に孝、妻は夫に貞、朋友は互ひに信、一々いはでもしれてある。その通りさへすると道ぢやによつて、互ひによろしけれど、親を泣かせたり、夫に腹たてさせたり、人を恨んだり恨まれたり、是皆宜しうないことぢや。これが道でない故に、川へはまつたり、荆の中へかけこんだり、ごぶへとびこんだりすると同じことで、扨ても難儀千萬なものでござります。尤も道はどこらにあるやらとくこ考へねばなりませぬ。幸ひ中澤道二先生の御はなしを承はり傳へましたことがござります。序でに御はなし申しませう。

中澤先生、ひこ歳、攝津池田へ道話に參られました。ある豪家に逗留いたしました所が、その家の主人どもより、心學執心ゆゑ、先生をもてなしのあまり、十四五になる娘を呼出し、道二先生を饗應させられました。此の

中澤道二に手島堵庵に就て心學を學んだ人、名は義道といつたが、五十五才で名を改め、二江戸に來て心學を講ず、享和三年殁す、年七十九。

花を入れる花を活けるといふた同じ。

松明夜明りを取るもの、といふは松明の拵へ方を覺えること、此の時分は松明は家に必要の品であつた。

花むすび絲もて種々の花の形を結ぶこと、調度の飾り又は衣服の菊綴等に供するもの。

娘御容儀もすぐれ、行儀もよく、花を入れ、茶を立て、琴をひき、また先生をなぐさめ、また歌なごをよまれました。ソコデ先生、その親たちに挨拶に、『是程におそだてなされるは、なみ〳〵のことではござるまい』と申されたれば、親達が圖に乘り、『嫁入りして先方で恥をかきませぬやうにと、只今いたした外に、松明、花むすび、畫も少しは習はせました』こ、段々娘自慢、ソコデ先生が、『それは中々大ていなことではござりますまい。それなればさだめて、肩こしを揉む按摩の稽古も、お仕こみなされたであらう』こいはれた。主人むつとしたる顏つきで、『貧乏は致して居れども、娘に按摩の稽古はまだ習はせませぬ』といはれた。道二先生笑ひながら、『それは近ごろ御心得ちがひでござりませう。貧乏金持によらず、女は夫の家にかしづけば、先方の親たちを我が親こしてつかへるが道ぢや。その大切の舅姑御が御病氣の時に、ゐかき、花むすび、茶や花では御かいはうは出來ませぬ。

此の議論は實に御尤なる。次第である。按摩の稽古には是非女子一通り覺えさせて置く必要がある。とれは嫁に行かば獨り立つ時なばかりでは家に在つて必要である。今日學校を出て居つたものは女子でも按摩を教へる所がある。古の儒者は孝の道を教へるものである。

出入の按摩や、をなご衆の手を借らず、嫁御が眞實に親たちの肩こしをなでさすりして、御介抱をなさるるが嫁御の道でございます。その道の修行に、按摩の御稽古はまだかと申したのでございます。とかく役に立つ御稽古が肝要ぢや』といはれました。流石の主人も大に我を折り、赤面して御詫を申されたこ承りました。

なる程琴三味線もよろしいが、なでさすりの介抱を心がけるも、子たるものの道ぢや。これで道はどこにあるやら、とくと御考へなされませ。遊所ぢかい所では、得ては娘の子に琴三味線や稽古させて、藝者の風俗を見習はす。ぢやによつて娘らしう育つがすくなうございまして、親の目をぬすんで逃げたり走つたりが多うございます。これは娘御のわるいのぢやない、親御のそだての惡いのぢや。尤も琴三味線端うた淨るり、役に立たぬこ申すのではございませぬ。心をつけて見ますれば、端唄一つでも皆善をすす

め惡をこらすの教でございます。アノ『四つの袖』と申すはうたに、

うき中のならひとしらばかくばかり
花のゆふべのちぎりこなるも

この唱歌で御考へなされて御らうじませ。これはこれ、若い男と女と、親のゆるさぬ緣むすび、面白からうこ思ひの外、思ふやうにならぬ。ういつらい世の中ぢやと知つたら、かうはせまいものこ後悔した文句でございます。こんなことは、世間にはままあるこで、嫁を貰つたら面白からうの、世帶を持つたらうれしからうのと、鍋尻こがさぬ畑水練のムチャクチャ思案。思ひの外に、世帶持つて見ると、面白うも何ともない。唯だ今日に追迴はされ、髪もかたちもかまはばこそ、まき髪に前垂帶、ふこころへ子をねぢこんで、みそこしさげて歩行いて見たがよい。ごのやうなものであらうぞ。これ皆親の教訓をきかず、時節到來を待たずして、はやまつて

端唄　三絃に合せて謠ふ俗謠の一種、短かい都々逸ほどなるもあり、長きは五七調にて三四七十節のものもある。

四つの袖
一うらき中の
ならひと知
らばかくば
かり花の夕
の契りとな
るも始めの
情け今の仇
つそ逢はい
ねばかうしは
たこともほ
んにあるまま
いよるな
やつらや。
仇に暮せし
月日のほど

も言はで思ひの涙の雨に、いとゞ朽ちなん四つの袖と云ふ上方端唄三下りの文句で、霜來の作つた歌だ。

世帶、所帶の轉、家を構へて生業をすること。

鍋尻とがさ。ぬ云々一家を持つて炊事などしたことのない經驗のないと。

たがへさせ。持たせること。

つぎ棹しまひ置く時の便利の爲、幾つにも分解せられ、必要に應じてつぎ合せて使用するもの。

イナ聲。かしな聲、を異聲。

難波今の大阪のこと。

術ない。手だてがない、方法のないこと。轉じてつらい思ひをしてといふ。義にいふ。

俄世帶、これは誰が知つたことぢや。皆おのれ〳〵がいたづらから、夫を何の分別もなう、三味線さへ彈くと面白いことに思ひ、五つや六つの勘辨のない女の子に、大きな三味線をだかへさせ、しかたがないゆゑ、つぎ棹にのぼりて、イナ聲出して唱うて居るを、喜んでござる親達は、御氣の毒千萬なものでござります。御油斷をなされますな。うろたへると琴三味線で育つた子は、親をすてて走つたり、缺落したりすることがあるものぢや。すべてうはきらしい花やかなことは、必ずひよんなことが出來まする。此の『四つの袖』も、作者の心は、いたづらをいましむるをしへの道ぢや。芝居淨瑠璃はやりうた、とかく目の付けやうが違ひまするこ、大間違になるものでござります。琴三味線を敎へて、嫁入先で間に合はさうこ思うたが、思ひの外に間に合はないで、嫁入せぬ先に、忍び男をこしらへて走るのは、皆目の付けやうのちがふによつてぢや、是で面白い話がござります。

昔、京にすむ蛙が、豫て大阪を見物せんこ望んで居りましたが、此の春思ひ立つて、難波名所見物と出かけ、のた〳〵這ひまはり、西の岡、向ふの明神から、西街道を山崎へ出で、天王山へ登りかかりました。又大阪にも都見物せんと思ひ立つたる蛙が有つて、是も西街道、瀨川、あくた川、高槻、山崎と出かけ、天王山へ登りかかり、山の巔で兩方が出合ひました。ナニが互に仲間同志なれば、めん〳〵の志をはなし、扨兩方がいふやうは、『此のやうに苦しい目をして、漸々とまだ中程ぢや、是から互に京大阪へ行きなば、足も腰もたまるまい。ここが名におふ天王山の巔、京も大阪も一面に見わたす所ぢや。ナント互に足つまだて、脊のびして見物したら、足のいたさも助からう』と、相互に相談きはめて、兩方が立ちあがり、足つまだて〳〵、向ふをきつこ見わたして、京の蛙が申しまするは、『音に聞えた難波名所も、見れば京にかはりはない。術ない目をして行かうより、是か

色代。あいさつといふに同じ。

らすぐに歸らう』といふ。大阪の蛙も、めをぱち〳〵して、嘲笑うていふやう、『花の都と音には聞けど、大阪に少しもちがはぬ。さらば我等もかへるべし』と、雙方互に色代して、又のさ〳〵と這うて歸りました。これが是れおもしろいたとへでござりますれど、ついは御合點がまるりにくからう。蛙はむかふを見わたした心なれど、目の玉が脊部についてあるゆゑ、ヤツバリもとの古さを見たのぢや。何んぼほどにらんで居ても、目の付所のちがうてあるには氣が付かぬ、うろたへたかへるの話。よう聞いて下さりませ。

或人の發句に

手はつけど目は上につく蛙かな

面白い發句でございます。『ハイ〳〵畏りました。左樣〳〵御尤でござります』と、口にはいへど、目は上につく蛙かなで、おれが〳〵の向ふ見ず。

滅多にむやみにといふに同じ。

一の谷のいくさは、攝津に、一の谷、二の谷、三の谷とあつて平家が立籠つたのを源氏が攻落したのである。

例の大松明何時も暗くて困る時は民家を燒かしたのでそれを大松明を付けるといつたのだ。

是を『放二其心一不レ知レ求』と申します。なんぼおれが〳〵で物をやり付けうとしても、中々おれがの細工では出來ませぬ。かやうに申せは、『おれが身體でおれが働き、おれが錢をまうけて、おれが口におれが物をくふのぢや。人さまの御世話にはなるまいし、おれがでなうてごうして世間がわたられるものぢや』と、滅多におれがをいふ人があるものぢや。これはきつい了簡ちがひ、御上樣の御政道がなかつたら、一日もおれがでは居られぬ。昔、一の谷のいくさの時、源義經公が、丹波の三草山から、攝津國へおしよせらるる時、山中に日を暮らして、案内はしらず、武藏坊辨慶を召して、例の大松明をともせと御意なされた。辨慶畏つて、諸軍勢に下知をつたへ、走りちつて、谷々にある家々に火をかけますれば、一面にもえ上る。此の火の光を便りして、一の谷へ出でられたと承ります。

爰をよう考へてごらうじませ。これはおれが藏ぢやの、是はおれが家ぢだ。

スッポンの石龜の地だんだに同じ、假名手本忠臣藏、何辛此の恥辱雪ぎやうはないかとつ力んで見ても、石龜のぢだ、及ばぬんだ事である。

おれが細工で自分の智慧はたらきでといふこと。

冥加のめぐみ、神佛のやうりやくみやうりはおれのとめぐみのこと。

やの、これはおれが田地ぢやの、これはおれが娘ぢやの、是はおれが女房ぢやのと、ごのやうにおれが〳〵をかづきあるいても、天下の亂れてある時は、スッポンの間にも合ひませぬ。ありがたいことには、四海太平にをさまり、御仁政の至らぬ隈もなく、それ〴〵の御役人さまが、夜のまもり晝のまもりと、御守りなされてござればこそ、屋根の下に寢ては居らるれ。どうしておれが細工で、手足のばして寢て居られるものではない。雨戸をしめたか、表の戸をしめたかと、吟味しまはつて、先づこれで用心よしと、落付いて御やすみなさる。その用心はどんな用心ぢや。四分板一枚、しかも裏表から削りて、二分板一枚、何程の用心ぢやぞ。大きなおならしても響きわれる位ぢや。それを盗賊がこはがつて這入るまいか。チト思案してごらうじませ。皆これ御上樣の御仁德、けつかうな御代に生れ合はした冥加のほども思はずに、おれが〳〵で氣隨氣ままをいひつのつて、こちの身

五とまへ藏の入口の戸のある所、轉じて藏の敵を算へるにもいふ。

卑下自慢卑下したり自慢したりすること。

代は千貫目、仰向けに寢て居ても、五百年や七百年は遊んで食うて居られる。藏が五こまへ、家屋敷が二十五ケ所、貸付の證文が三百貫目、これほどあると、土佐をどりして奢つても、五十年や百年は、貧乏する氣づかひはないと、胸中に目のある蛭了簡、むかふ見ずの胸算用、大丈夫の御要害ぢや。何んにも頼みにはなりませぬ。寢て居るうちに、彼の大松明にならうやら、大地震が起らうやら知れぬが、浮世のありさまでござります。此の頼まれぬといふについて、今一つ話がある。眠りさましにより聞いて下さりませ。

アノ蠑螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。そこであの蠑螺が、何ぞといふこと、うちから蓋をびつしやりしめて、大丈夫のことぢやと思うて居まする。鯛や鰹がうちやましがり『コレ蠑螺や、おまへの要害は大丈夫なものぢや、うちから蓋をしめたが最後、外からは手が

引さらへて　淩ひ取つてなくなること。

臺　自分の踏んで立つて居る臺のこと。

後光　佛の身より發する光、佛像の後に想像する光を放てる如く飾を付けたるものとも螺螺の殼の光りのこと。

させぬ。さりとては結構な身の上ぢや」といへば、螺螺が髭をなでて「おまへがたがそのやうにいふてくれるけれど、あまり丈夫なこともない。しかしながらマアかうして居れば、まんざら朝儀なこともない」と、卑下自慢をして居る時、ざつぷりと音がする。螺螺がうちから急に蓋をしめて、じつと考へて居ながら、今のは何であつたが知らぬ。網であらうか、釣針であらうか。是ぢやによつて要害が常にしてないと、どうもならぬ。鯛や鱸は取られたか知らぬ。さても心もとないことではある。シタガまづおれは助かつた」と、兎角するうち時刻もうつり、「モウよからうとそつと蓋を開け、あたまをぬつとさし出して、そこらを見わたせば、何となう勝手がちがふやうな。よく〳〵見れば魚屋町の肴やの店に、此のさざえ十六文」と正札付になつて居ました。何と面白い話でございませうが。

おれが〳〵を引つさらへて、家も藏も智慧も分別も、臺も後光も、まるで取られてしまうたことは知らず、氣の毒な螺螺、このやうな連中が、からや天竺には、得てあるものでございます。こかくおれが〳〵は、たのみにはなりませぬ。ある人の道歌に、

はしなうて雲のそらへはのぼるとも
おれが〳〵はたのまれもせず

是を『放二其心一而不レ知レ求』と仰せられたのでございます。何事もわが身へ立ちかへつて、手まへの吟味には氣が付かず。ただ向ふへ〳〵と目の付くが放心でございます。放心ぢやというて、心が飛んでしまふのではございませぬ。身に立ちかへることの出來ぬのぢや。すべて是まで申すところは、金銀財寶のことばかりではない。器量をたのみ、奉公をたのみ、智慧をたのみ、分別をたのみ、力をたのみ、格式をたのみ、これさへあれば大丈夫ぢやと思うてござる人は、みな螺螺の御連中ぢや。こかく何事も身

道歌　精神修養のことをよみたる教訓の歌。

に立ちかへつて、御吟味が御肝要でござります。（休息）

鳩翁道話　壹の下

「人、鷄犬の放るることある時は、之を求むることを知る。放心あるも求むることを知らず。學問の道他なし。その放心を求むるのみ」これは、孟子がたとへを以て、御示しなされたのでござります。「鷄犬」とは、犬、にはとり。すべて飼猫或は鷄など、いつも家に歸る時分に歸らぬと、その飼主がうろうろと尋ねまする。犬にとられはせなんだか、蛇にとられはせぬか、もしや人が盗んだかと、向三軒兩隣、まひ子か尋ねるやうに「モシこちの三毛はこなたには居ませぬか、鷄はまるりませぬか」と、尋ねあるくは人情でござります。ここが入用の所ぢや。犬鷄は紛失しても、格別害にはなりませぬ。心は身のあるじと申して、一身の旦那樣ぢや。その心が物の爲に奪はれると、親の意見も耳に入らず、主人の教訓も空ふく風。蛙のつらに

心ここにあらざれば大學にあり。

生れつかぬかたわ性善の人が不善の人となるのをいふ。

水かけたやうに、目ばかりぱち〳〵して、口にはハイ〳〵というて居れど、心ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞えぬ。うまれつかぬ片輪ものの仲間入り、これは是、皆心の紛失してあるによつてぢや。此の心を尋ねやうとも、さがさうとも思はず、親がわるい、主がわるい、夫がわるい、兄がわるい、八兵衛はわるい奴ぢや。おまつはいけぬ女ぢやと、むかふへばかり目を付て、我が身にたちかへつて、心を尋ねることはせぬ。ナント酷い事ぢやござりませぬか。犬鶏は尋ねても、肝心の心はたづねぬ。よくうろたへたものでござります。是ぢやによつて聖人はこれを御歎きなされて、人の道あることを御示しなされて下さる。此の御示を承はるを學問といふ。其の學問の趣意は、此の心をたづねさがすのでござります。故に、『學問之道無レ他。求二其放心一而已矣』と仰せられました。『而已』とは、盡き〳〵て餘りなきの辭、心を求むるの外、別に學問らしいものはない

八千餘卷佛經の本のあらゆる數が八千餘卷あること。

諸史諸子の誤りなるべし。諸子とは、孟子、荀子、莊子、韓非子、管子などいふ、この人々等の著した本を諸子の書といふ。

百家儒家、道家、墨家、縱橫家、法家、刑名家、小說家、農家等のものをいふ。

と、屹度御うけ合ひなされた御證文でござります。強ち唐やまとの故事來歷を知り、文字の穿鑿ばかりするを學問とは申しませぬ。兎角心のとぢや。八千餘卷の經論も、諸史百家の書も、皆心のゆくへをしるした所書でござります。此の心を求むるとは、前以て申す我が身に立返ることでござります。立かへることを知らぬと恐ろしいものぢや。どこまで往かうやら知れませぬ。又立返ると有りがたいものぢや、孝子にも忠臣にも立どころになられます。善惡二つは、身に立ちかへるとかへらぬとの二つの境。『道二つ仁と不仁』と仰せられたも、御尤でござります。御ねむからうが聞ておくれなされませ。

去る田舍に、相應にくらす百姓がござりましたが、夫婦の中に男の子一人、ナニガ可愛さのあまりに、牛が子をねぶるやうに、あひだてなうそだて上げられました。ソコデその子が次第に横着ものになり、馬の毛を拔いたり、牛の鼻をくすべたり、近所の子供を假初にもたたいたり、泣かせたり、

わやくの中に成人して、こうぐ〜手にあまる不孝もの、小力はある、大酒は飲む、小博奕はうち覺える。いつしか神事相撲を取覺え、かりそめにも喧嘩口論、女郎買やら妾ぐるひやら、たま〜親達が意見すると、大聲をあげてははぐりこみをくはせ、『こなた衆が放蕩者ぢやの不孝ものぢやのと、其の不孝ものは誰が賴んで生んだものぢや。おれは生んでもらつて迷惑して居る。それほど放蕩者がきらひなら、元の處へをさめて貰はう。さうするとおれもたすかる』などと、滅法な口ごたへ、親たちも詮方なう、其の身はめん〜年は寄る。息子は次第にいきりをも、可愛いこ仕樣がないとで、勘當も得せず。氣隨氣ままをさせておくと、いよ〜圖にのり、かしこでは投げたの、ここでは腕をねぢ折たのと、あら〜しい大喧嘩、其のたびごとに、親達はいふに及ばず、親類緣者の胸板に、釘うつ樣な恐ろしい惡黨ものがござりました。是はこれ、腹の中から此のやうなわんぱくも

所書住所を書きしるしたもの。

道二つ道二仁與不仁而巳とある、孟子の語である。

牛の鼻を牛の鼻を草などを燃していぶして牛をいぢめるとであらう。

わやく わんぱくを いふ、京都大阪の語。

はぐり はぐりこみはぐりとは、くるとと、剝ぎ取ること、親の言をまくり返すこと。

いきり いきりをるは氣息を張る、勢が加はる、いきまくこと。

義絶 義絶のために親子兄弟の緣又は朋友の交はりなどを絶つこと。

願書 願書は、我子を勘當したり、親類の義絶をなす場合には、お上へ願ひを上げるのであつた。

のではなけれども、おれが〜が增長して、心を取失うたばかりで、此のやうな難作もの、ナント放心は恐ろしい事ぢやござりませぬか。勿論親類緣者から親達へ、勘當せいとたび〜催促はするけれども、何分一人子のことなり、けふは勘當あすは義絶と口ではいへど、勘當もせず、徒に年月が立つて、かの横着ものが二十六歳になりました。

次第に惡行はつのる、後々は親類緣者へ、どのやうな難儀をかけやうやら、怖氣が立つたもの故、一同に評定して、親たちへいうてやるには、『急に勘當をさつしやらぬと、親類中各方こ義絶を致さねばなりませぬ。アノ息子をあのままにしておかれると、親類は申すに及ばず、村中へも、ごんな難儀がかからうやら知られぬ。御夫婦には恨はなけれども、面々家が大事でござるによつて、義絶を願ひませうか、勘當をさつしやるか、有無の返事が聞きたい』というてよこしました。そこで親達もせんかたつき、『子

老牛云々後漢書揚彪傳に見えたり、彪が子修、曹操の殺す所となる、操彪を見て曰く、何ぞ瘦ずと問うて公の甚しきや、對へて曰く、愧らくは、日磾先見の明なし、猶老牛舐犢の愛の如しと、操之が爲に容を改むとなり。

ゆゑに親類義絶になつては、先祖へもすまぬこと、さらば、今夜みな寄合して下され。相談の上願書をしたためませう。勿論親類中、何れ御連印下さらねばならぬ。御苦勞ながら印形御持參にて、暮草々より御寄り下されい』と返答しられた。古語に、『老牛、犢をねぶり、牝虎子をふくむ』と、畜類でも鳥類でも、身にかへて子を可愛がる。ましてや人の上で、その子を勘當せにやならぬやうになつたら、さぞかなしいことでござりませう。これ皆その子の放心から起ることぢや、身に立ちかへりさへすれば、波風もなうをさまるのに、さりとては身に立ちかへる人がない。親は勘當しむなうてならぬけれども、子の方から、勘當してくれと突付けるにはこまつたものぢや。近世、德本上人の歌に、

これほどによれつもつれつする彌陀を
あへて賴まぬ人ぞはかなき

德本上人宗江戸淨土宗一行院の住職、本姓畠山氏、畠山重忠の後裔、寛政十二年に六十一才にて寂す。

野良息子のらをつくす息子、道樂むすこ、どらむすこ。

ほえづら將に泣かんとする顏付、なきづら。

是はこれ佛の大慈大悲をいふのぢや。我が方では、本心が、それはわるい、これはようないと、明けてもくれても、御世話をなされるけれど、身贔屓身勝手の私心私欲が、さうはまるるまいと、兎角本心にそむきをる。親の子を思ふも、不孝ものの親を思はぬも、能う似たものぢや。『あへてたのまぬ人ぞはかなき』。銘々本心に立ちかへつて、御助かりなさりませ。

さてかの野良息子は、この日近村で、博奕を打つてをりました。折から村の友達が來て、『今夜貴樣を勘當すると、親類が集會するげな。何ほ貴樣のやうなものでも、勘當しられたら、定めて難儀するであらう』と、半分きかずに大聲あげて、『何ぢや今夜おれがうちで勘當の評定か、こいつ面白いことが出來て來た。全體親父や母者の吼えづらが、此のごし頃見とむなうて、氣色がわるうて、こたへられたものぢやない。勘當うけたら一本だち、唐へ飛ばうが、天竺へ宿がへせうが、誰歟點のうち人がない。このやうな

團十郎　市川團十郎の芝居の役者にて荒手あつた。

見せ付や　表に坐して客を待つ下等の遊女の守貞漫稿に見ゆ。

泥のやうに　泥のやうに酔たこころで、『さらば此の勢ありがたいことはないぞ。されば今夜評定の席へ乗り込んで、『何でおれを勘當するのぢや』と、一番團十郎をふんでゆすりかけたら、五十兩や七十兩ぐらいは、巾着へ入れたやうなものぢや。其の金持つて京か大阪へ出て、見世付屋始めたら、おもしろいことであらう。ドウゾ今夜、首尾よう山のあたるやうに、前いはひに一盃ぜう』と、同じ仲間の惡鬼たちと、茶椀酒の大酒もり。日のくれまへに、泥のやうに酔たこころで、『さらば此の勢で内へいんで、一勝負はつて來よう』と　大脇差をぼつこみ、我が居村へ歸つた時分は、丁度初夜まへ、大方今時分は、親類でもがより集り、ない智慧の底ふるうて、評定をして居るであらう。その所へをごりこんで、大だだけにだだけたらば、百兩位はつかめるであらう。と、既に我が家へ歸らうとしたが、屹度思案し、親類よつて居る中へ、おれが顔を見せたらば、皆俯いて居るであらう。其の中で大聲あげるも、何とやら拍子がない

初夜　戌の刻のこと、午後八時頃のこと。

あくぞもく　芥藥屑と書く、人を非難すること、のゝしること。

店おろし　本店から小見世に卸し賣るやうに、譯山出すこと。

ちに響へて言つたので金をねだり取らうと云のである。

おれがことをあしざまいうて居る其の圖に乗り、躍りこまぬと座つきがわるい。コイツハ一番思案を仕かへて、うちの藪から座敷の縁さきへまはり、一家のやつちが評定を立聞したら、定めておれがあくぞもくぞを店おろしするであらう。其の拍子に戸障子蹴破り、大がみなりと出かけたら、拍子があつて面白いと獨思案し、雪踏をぬいで腰にはさみ、尻引からげて、裏の藪から切戸を越え、縁先へまはつて見れば、果して中には、ひそ〳〵と評定の最中、雨戸のすきまから覗いて見れば、親類縁者が車座に直り、めん〳〵願書に判をおして居る。その願書が兩親の前へ來ると、かの息子がこれを見て、サアここが勝負ぢや。親父の判を仕よるを相圖に、この戸を蹴破つて飛込まうと、居合ごしになつて、息をつめてのぞいて居る。ナント人も、おそろしい心になればなるものでござりませぬか。

孟子の、『人の性は善なり』と仰せられたるに、微塵もちがひでござりませ

雷のやうな大きな聲を出すこと。

車座　大勢がまろく周りて相對して坐すること。

切戸　一片の戸びらを付たる戸、四ツ目垣のある庭の小門などに立てるもの。

居合ごし　剣術の一派、すわりたるまま、佩刀を自在に抜きて敵を斬り又は敵と戰ふ林崎もの重信より起る、居合抜きの腰つきになること。

ねども、其の習性となる時は、此のやうなおそろしい惡黨ものが出來ます。此のごき孔子孟子が、千日道を御ときなされたとて、立ちかへりさうな勢ぢやない。かう堅まつた惡人は、むけん地獄の釜こけといふものぢや。たとへ釋迦如來が元服して、土佐をどりをめされても、中々性根のつきさうなことではないが、不思議にこののらむすこが、惡心をひるがへして、大孝行の人になるといふ、是からが成佛の段でござります。

人の親の心はやみにあらねども
子を思ふ道にまよひぬるかな

かの親たち夫婦のまへに勘當の願書がまはつて來ると、母親は大聲をあげてなき出す。爺親は歯もなき歯ぐきを喰ひしばつて、さて俯いて居らる。やがてくもつた聲で、『おばば印形を取つてござれ』母親は返事も出かね、なく〳〵箪笥の引出から、革財布にはいつた印形を、爺親のまへにお

習性となる　習慣が遂に天性となつてしまふこと。

釜こけ　釜こけは八大地獄の一、絶間なく苦あること。

無間地獄　無間地獄の所、そこの地獄に行つて、釜うつてにせられてしまふこと。

釋迦如來　釋迦如來が元服して云々。

土佐踊　土佐踊は隨筆大觀遠碧軒記に、帶刀先生希義、土佐に至る、高祖我目と長曾我目として殺

くと、彼の野良息子は、雨戸のそとから息をつめて伺うて居る。其のうちにごて〳〵ご財布の紐をとき、印形を取出し、肉をつけて、既に判を押さうとする時、母親が其の手にすがつて、『先づ待つて下され』といふ。てゝ親は、『此の期におよんで、親類中が見て居らるる。未練なことをいはしやるな』といへども聞かず『マアわしがいふことを聞いて下され、尤もあの不孝ものに家を讓つたら、三年立たぬうちに草をはやすであらう。それがかなしいというて、天にも地にもたつた一人の子を勘當したら、跡へかはりをもらはねばならぬ。其の貰うた養子が實體でこちら夫婦に孝行をし、家も相續してくれればよけれども、ごうもたしかに養子は孝行なと定まつたこともござるまい。もしその養子が不心得で、家を野原にせうやら、此方等のやうな肩のわるい夫婦なれば、そのほども知れぬではないか。おなじ子ゆゑにつぶす身代なら、悴のために家を失ひ、なじんだ村を立退いて、

す、士佐踊といひて鉦を叩きて念佛せり、之を踊るをいふ、後にては刀脇差にて合ひて男みの踊る、と云へば、希義を馳せ走に見せかけて殺せし餘風なり、土佐一條家も高祖長曾兩派にて殺せりとあり、これは慈悲深い釋迦遷俗手荒しい土佐踊を惑ひて此悪人をも迷ひ改めまてらぬとあいふことである。

人の親の心は歌萬葉集に出づ、山上憶良の歌なり。

肩のわるいの運のわるいと。

袖乞人の袖にすがつて金錢物品を乞ひあるくこと。

無心合力他憚りなく人に金錢物品の貸與を乞ふを無心といひ、人に物を施して貰ふことを合力といふ。つまり同じことなり。

夫婦袖乞になるとも、我が子の尻からついて歩行いたら、わしは本望に思ひます。五十年この方、一生に一度のねがひ、ドウゾ聞入れて、勘當をやめて下され。子ゆゑに乞食をすると思へば、恨にも思ひませぬ』と聲をあげて泣々いはるる。親類もこれを聞いて一同に顔を見合せ、親父がなんといはるるぞと、まもりつめて見て居れば、爺親は何思うたか、印形を財布へ入れ、手早に財布の紐をしめて、かの願書を親類のまへにさしもどし、『きて〳〵一家中へ對して面目ないことでござれども、いまばがいふところ、尤に思ひまするゆゑ、向後悴は勘當はいたしますまい。かういへば、其のあまい心でそだてたものゆゑ、あのやうな不孝ものが出來たと、定めて御まへがたが笑はつしやらうが、笑はれても苦しうござらぬ。勿論アノ悴を勘當せねば、この家がつぶれることは、物三年まちますまい。わが子ゆゑに先祖代々の家を野原にするのは先祖へ對してすまぬといふことも、能う合點して居りまする。また勘當せねば、おまへがたご不付合になり、親類義絶も合點でござる。必定こちらが村を立ちのく時、無心合力でもいはうかと、その用心の義絶であらうが、必ず案じて下さるな。世間の義理も、先祖への不孝も、親類の義絶もかへり見ぬのは、子が可愛ばかり、その子の尻から乞食して付いてあるくことなれば、此等夫婦が本望といふもの。決して御まへがたへ無心合力はいひませぬ。ハテ何で死ぬるも一生ぢや。可愛い子のために大道にのたれ死に、並木の肥しになるのも、好んですれば恨とは存ぜぬほどに、早々おまへがたも内へ引取つて下され。翌日から物もいひませぬぞ。子ゆゑなら何といはれてもかまひはござらぬ』と同じく大聲をあげて、男なきに泣かるると、母親も勘當せぬと聞いて、これもうれし泣になく。親類縁者はあまりの事にあきれはて、返答もせず、ただ夫婦の顔をうちながめて居るばかり。ナント親の子に迷ふあはれな心を御

推察なされませ。猫が子を喰はへあるくやうに、蔭になり日向になり、人のそしりも、先祖への義理も、わが身のつまらぬ行末も、かまはばこそ。子の可愛いにとられきつて、迷ひにまようた親の心、實にあはれに氣の毒なものでござります。これがこれ、此の親たちばかりぢやない。世間に子を持つた親の心は、みなこの通り、先師石田先生の歌に、

子に迷ふ親の心を見るにつけ
我がかぞいろもかくやありなん

人の親の子に迷ふを見て、我が父母もかくぞ思召さんと思ひやりて、御よみなされた歌ぢや。實に此の通りに違ひはござりませぬ。此の親の大慈大悲の光明が、かの不孝ものの腸わたへしみ渡ると、ありがたいものぢや。さしもおそろしい鬼のやうな横着ものも、五體を〆木でしめらるるやうに覺え、何といふことは知らねども、胸さきへ涙が突掛け、聲をあげて泣かれはせず。『かます袖を口にくはへて、大地にたふれてしめ泣にないて居る。圓位上人の歌に、

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるる

能うよんだ歌でござります。此の時、かののら息子が、親を辱けないと思うたでもなし、又ありがたいと思ふたのでもない。何かは知らず、親の慈悲心が腸へこたへると、能うしたものぢや。立つても居ても居られぬ。これが是れ、人々固有の本心というて、あきらかな德に生れついては居れども、おのれが氣隨氣ままの身勝手で、しばらくその光をかくして居たのぢや。されども、親の大慈大悲の光明で、腸をつらぬかれ、自然と息子が持ちまへの光明がさそはれて、輝き出すと、氣隨氣ままのむら雲は、いづくへやらきえ失せて、眞實そこから親の慈悲がありがたうなつて來る。

先師石田先生の歌のこと、石田梅巖の前に出づ。

子に迷ふの歌 かぞは父、いろは母、かぞいろは母の古語。父母

五體手足と兩肢と胴體との五つなり。

かます袖 角袖をいふ。壺の碑に、古の袖はそぎそでなり、今の袖はかますなり、とあり、角袖をいふ成べし、壺の碑に古の袖はそぎ袖なり、今の袖はかます袖なりとあり

圓位上人 西行法師の俗名は佐藤と、西行は義清なり。鳥羽上皇の北面の士、後剃髮して西行と改め圓位と號す。

●何事の歌行　●此の歌は西大寺　●が伊勢の歌廟　●にて参拝し　●そ崇厳　●感じたる詠歌　●尤草紙　●いふ本　●此の歌　●養尼の歌　●し安　●と　●はとる。　●んに　●ある。

ごくさかろそのはら山の木の間より
　みがかれ出づる月のさやけさ

格別の悪黨ものが本心にたちかへると、一際すぐれてみがかれいづる月のさやけさ。ナントありがたいものではござりませぬか。さて彼の息子はすぐさま座敷へかけこみ、親たちへ詫言せんとはおもうたが、まてしばし此のまま駈け込んだらば、親類縁者もおごろき、いかなることを仕出すぞと、親達も御心づかひであらう。何知らぬ顔にて、表口から座敷へ出で、親類について詫言せんと一決して、しのび足に裏より表へまはり、わざと雪踏の音高く、咳ばらひとともに座敷へ通れば、親類は大におどろき、親達はにくい我が子の顔を見て、夫婦とも泣いてござると、かの息子もナンニモ言はずに、差俯ぶいてないてゐる。良ありて親類中へ、『さて是までは、勘當〳〵と度々聞きましたれども、さのみつらいとも存ぜなんだが、今夜の寄合さうけたまはり、どうした事やら、しきりに心細う覺えまする。何分これまでは重々の無調法。此の上は屹度改めまするによつて、今夜の勘當しばらく御用捨を下されい。永うとは申しますまい。わづか三十日の日のべ、其のうちに性根があらたまらずば、その時勘當しられても、一言も申分はござらぬ。ドウゾ御まへがたの御取成で、親達が三十日日延をいたしてくれらるるやう、御詫をなされて下されい』と、いつにない頭を疊へすりつけて頼む。此の時親類中は、親達が手づよい返答に、その座しらけて立つにも立たれず、拍手のない折から、此の息子が一言に、これ幸ひと一同に口をそろへ、『今夜の所は、待つてやつて下され』と詫言する。親たちは本心に立ちかへらいでさへ勘當はせぬ心、まして今の一言を聞いて、ただうれし泣にないて居らるる。親類もこれをしほに、『隨分孝行にさつしやれ』と云捨てゝ、其の夜の評定はやみました。これから彼の息子どのが、

地頭　源頼朝が諸國の莊園に置きし地名、莊園を支配せしもので後世は一區の土地の領域の領主の稱となつた。

大庄屋　庄屋とは、德川時代に領主が土民の中より命じて、一村又は數村の統轄せしめしもの、一村の長、名ぬしのこと。

手のうらをかへすやうに孝行な人となり、二親につかへるありさま、實に小兒の父母を慕ふが如く、惡行はあとかたもなく消失せました。此の事世間に取沙汰が高うなり、半年たたぬうちに、御地頭樣の御耳に入り、つひに御目がねを以て、大庄屋役をかの息子に仰せ付けられました。是でかの息子の孝行のしわざ、御推察なされませ。さて其のうち三年ばかり立つて母親が大病末期に、かの息子どのを呼んでいはるるには、「いつぞや勸當の評定の節より、何と思うたか、志が改り、此の上もなう孝行にしてくれる。モシ其の時にそなたの志が改らず。其の中におれが死んだらば。地獄へゆかうより外はない。今はそちが孝行にしてくれる。何も思ふことがないゆゑ、今死んだら極樂へゆくにちがひはない。ソリヤおれを佛にしてくれるは、皆そつちが孝行のゆゑぢや」と、手を合せてをがみながら、臨終をしられたと申す事ぢや。

當來の果を以て　當來ことは、未來の定不定は、但し未來の語は決定來世のことを簡ばざれども當來の語はそのことを顯すのである。

下座　こゝで說教をやめて、高座を下るこの意である。

なるほど『當來の果を以て、未來を知る』と、この世で心苦しければ、未來もまた心苦しい。今日の手おくれは、明日へ付いてまはる。心の苦しいは地獄、心の樂なは極樂、親の苦樂は子たるものの所作にある。子善なれば親は佛、子惡なれば親は鬼になりまするぞへ。一旦若氣のあやまりで、何の分別もなう、親に心づかひ懸けたり、親を泣かせたりの不孝も、此の道理をわきまへて、今日只今志を立直し、我が身に立ちかへつて孝行すれば、親御さまは今日かち極樂ぐらし、又立ちかへることがならいで、是までの不行狀がやみませぬと、親御は其のまま地獄ぐらし、地獄極樂はただ身に立ちかへるこ、かへらぬとでござります。このたちかへるを放心を求むるといふ。是すなはち學問の事ぢや。猶又あとは明晩御はなし申しませう。（下座）

鳩翁道話　貳の上

孟子の告子の上篇にあり。

孟子曰く、『今無名の指、屈んで信びざることあらんに疾痛事に害あるにあらざるなり。若し能く之を信ぶるものあらば、即ち晋楚の道を遠しとせざらん。指の人に若かざるは、即ち之を惡むことを知る。心の人に若かざるは、即ち惡むことを知らず。此を之れ類を知らざるといふなり』さてこれは、前晩辯じました『仁人之心也』の次の章でございます。即ち『學問之道無レ他。求二其放心一而已矣』といふ言によつて、孟子またたとへを引いて、人の心の大切なることを、御示しなされたのでございます。

『今』とは、今ここにと申すことぢや。『無名の指』とは、小指の隣の指で

千里支那の一里は我が六町余にあたるとしかいはゝ、遠い所の文通ふ義でありとある。

ございます。其の外の指は、親指を大指といひ、人さし指を頭指といひ、高々指を中指といひ、小指を小指と申します。ただ小指の隣のゆびに名がない。尤も紅さし指とは申しますれど、是は御婦人方ばかりのことで、天下通用ではございませぬ。そこで、名のないが名となりまして、無名指と申します。なにゆゑ又名がないぞといふに、トント用のない指ぢや。物を握るは親指小指の力、つむりをかくは人さし指、酒のかんを試みるは小指の役、皆それ〴〵に用があれども、無名指ばかりは無用の指。あつて邪魔にならず、なくて事はかけませぬ。一身のうちにて尤も輕いものぢや。其の指が屈んでのびぬ。勿論いたみもかゆみもない。がるがゆゑに『疾痛事に害あらず』と申してある。畢竟なくても苦しからぬ指なれば、まがつてあつてもいたみさへなくば、捨て置いて能い筈なれども、もしこれをよく伸ばしてくれる醫者どのがあると聞いたら、道の遠いもいとはず、定めて療

羞悪之心。孟子の公孫丑の上篇にあり。

治を受けにゆくであらう。それは何ゆゑ。指が世間の人と少し違つてある故、恥しうおぼして、療治を受けまするのぢや。『晋楚の道』とは、晋の國と楚の國とは、道法が千里、これは遠い所をいこはずといふたとへぢや。これ其の指の人なみにないをいやがるから參ります。そこで指の人にしかざるがためなり』と申してこざります。成ほど能う人ば恥を知つたものぢや。其の筈でこざります。『羞悪之心、義之端』と申して、恥を知るが人の生れつき、しかしながら、その恥を知るに二樣こざりまして、姿の恥を知つて、心の恥を知らぬ人がこざります。是はきつい御了簡ちがひぢや。心ほど大切なものはこざりませぬ。心は身の主と申して、二軒の内では旦那どのも同じ事ぢや。其の旦那どのの心が煩ひくるしんで居るを捨置いて、家來のからだばかり可愛いがり、膝がしらすりむいた、ほくちを付けい。炙がいほうた、膏藥はれ。風ひいた、葛根湯、根ぶか雑炊、生姜酒と、か

ほくち燧火を移し取るもの、ための通常いちびの設を燒いて消炭とし、たものをこめ血をもしたものだ。

根ぶか雑炊ねぎを入れたおぢや飯のこと。

りそめにもからだの御世話はなされまするぢ、心の事は一切御かまひなしぢや。人に生れて人のやうな心も持たず。鬼のやうな心を持つたり、狐のやうな心を持つたり、蛇のやうな心を持つたり、鳥のやうな心を持つて、恥かしいとも思はず。からだばかり吟味してござるは、ごういふ所から間違うて來たやら、此の間違は古うある事こ見えて『指不レ若レ人、知レ惡レ之。心不レ若レ人、則不レ知レ惡。此之謂レ不レ知レ類』、と孟子もおほせられた。是は重いと輕いと分らぬのぢや。大を捨て小をとるこ申すものでこざります。

人情は一般、小はきらひ大はすき。ソコデ親類縁者へまねかれて、御馳走にあづかる時、本膳が出るあとから、燒物を引いてまはるこ、はや目の玉がきよろつき出し、向三軒兩隣をにらみまはし、わが燒物こ見くらべて、隣のやき物が五六歩ほど大きいと、肝癪が胸につつぱり、ここの亭主は何こ心得て居るぞ。太郎兵衛も御客おれも御客ぢや、何でおれには、小

焼物魚類をあぶり焼きにしたもの。

向三軒両隣云々自分の御客の膳を見廻はすこと。

かたちこそ師の歌集に出づ。古歌に、

今は古歌の歌集に出づ。

女ごもの見れば笑ひけれよめる、とあり。

さい焼物をつけたのぢや。何ぞこれには意趣遺恨でもある事歟ど、腹の中がねぢれ出す。能うおもうて御らうじませ。焼物に何の遺恨があるものか、是ほどの僅なことでも、小をきらひ大を取る。夫に何ぞや、指のまがつたのを恥かしう覺えて、心のまがりは苦にならぬといふは、大をすて、小を取ると申すものぢや。さるによつて孟子も『此之謂レ不レ知レ類』と御しかりなされた。ナント人は能ううろたへたものぢやこざりませぬか。古歌に、

かたちこそ深山がくれの朽木なれ
心は花になさばなりなん

指や足にかかはつた事ぢやこざりませぬ。皆心のことぢや。心がまがつて有つては、色は白からうが、鼻すぢは通つてあらうが、はえ際がうつくしからうが、夫は見せかけばかりで、何のやくにたたぬ事、蒔繪の重箱に馬の糞入れたやうなものぢや。これをほんの見かけ倒しと申します。飯たき

後藤祐乗、宗乗等ノ家のこと、此人々名工は金高い。祐乗は足利時代の人、永正年間死す、九十八。

目貫　刀剣の目釘に飾つた金具のこと。

水鏡　水面の澄み渡りて物の影のうつること。

杓子　あたりあてゝ魚をすくひ上げること。

のおさんどんが、流し元で鍋の尻を洗うて居る。丁稚の長吉が側へ來て、『おさんどん、おまへの鼻の先に墨がついてある。見ごむない』と教へてくれる。おさんどんはうれしがつて、「さうかえ、どこに付いてある」と、指の先に手拭をまいて、額口でおのれが鼻の先をながめ、後藤が目貫をほるやうに、そこら中ひねくりまはして、『長吉どん、モウとれてかえ』『イヤ〳〵ほうべたの方へ餘計になつた』『ドレ〳〵何處に』と、水鏡に顔をうつして掃除してござる。おさんどんの心には、『アノ長吉どんは、可愛いらしい子供衆ぢや。晩のお菜を。杓子あたりで、御禮申さにやなろまい』と、滅多にうれしがつて禮をいふ。もし此の長吉どのが『コレ〳〵おさんどん、御まへの根性は、しぶとい根性ぢや。チトふくれづらやめなされ』というたら、おさんどんが何といふのであらうぞ。『チト考へてごららじませ。あたなめくさつた小丁稚づら、わしが心がゆかんであらうが、三角になつ

上下。徳川時代の礼服で肩衣と半袴のこと、通常上下とも同色のものを用ふ。

肩衣。素袍の袖を去つたやうなもの、しこゝは上但下の上の衣のこと。

刀にそり打つて。刀に力を入れるあり様をいふ。

錫うちなら。錫刀の錫をかち〳〵ならすこと。

てあらうが、おのれが世話になるものか。おのれ覺えてけつかれ。小便たれても、ふとんの洗濯はしてやりはせぬ』と、角のはえぬ鬼のやうになりますが、これはおさんどんの事ばかりぢやない。

イヤナニ軍太兵衛どの、『御上下の御紋が少しかたよつて見えまする』軍太兵衛しかつべらしう肩衣を正して、『コレハ〳〵御氣を付けられ、千萬辱う存ずる。何なりとも相應の御用もござらば承るでござらう』と、嬉しさうな顔して挨拶せらるる。こいつが間違うて、『時に軍太兵衛どの、足下の御心術、甚以て其の意を得ませぬ。チト心を正直に御持ちなされ。心のゆがみが見えて、甚だ見苦しうござる』こいつたら、どうするであらうぞ。刀にそり打つて、錫うちならし、忽ち刃傷に及ぶであらう。ナント人は、からだのこと世話してやると、滅多にうれしがつてなほす。心の世話をする人があると、眞黒になつて腹を立て、其の心をなほさうとせぬは、どう

ふしやうぶしやう不性無性にやう〳〵なるやうにて。

硯蓋。硯箱のふた後にはその形のものを造りて口取肴などを盛りて酒宴に用ゐた。

一切ほかのことつて切なかつて居ない残ることいふに同じほかは外の意。

いふ拍手の間違ひで、是程まで迷うたものでござりませうぞ。是はよその事ではない。御互に、大か小か、色かへ品かへ、こんな間違は得てありたがるものでござります。よう御吟味をなさりませ。是がこれ、形は人の目にかかれども、心は人の目にかからぬゆゑ、ゆがんであつても、まがつてあつても、くるしうないと、此の無分別から起る事ぢや。是ぢやによつて少しも油斷はなりませぬ。

ある所の旦那どのが、臺所に居眠つてゐる長吉をよび起して、『コレ長吉、御客様がもう御歸りなされた。奥にある酒やさかなを臺所へ運んだがよい』長吉目をこすり〳〵ふしやうぶ〳〵に返事しながら、奥へ行つてそこらを見れば、硯蓋や小鉢やら、うまいものの勢ぞろへ、こはいものぢや。誰が催促もせぬに、目の玉がきよろつき出し、『なんぢや、こいつはうまさうなものがたんとある。硯蓋は鶏卵の卷焼、タッタ一切ほかのこつてない。よう

飯蛸・望潮魚ともいふ。この一種で腹中に飯粒の如き白き肉アある。

南京・支那の南京焼のこと。

座禪・禪宗の僧侶の行事の座禪。坐を正して静かに心を練るわざ。

隠れたる・よりて云々・中庸、首章の語。隠れたるものより居るものは明らかなりといふこと。

者婆・ヂャの訛、活又は固活能と譯す、婆羅王の子、婆羅生れたる時に針と筒と薬とを持せりといふ。昔の印度の人の名。

喰ふ客ぢや。こいつは何ぢや。ハメア蒲鉾ぢやさうな』と、一切つまんで口へほうばり、側を見れば、飯蛸が七ッ八ッ。南京のごんぶりの中に、車座に座禪してゐる。こいつはえらいとつまむところへ、旦那のあしおと、これではならぬと袂へおしこみ、銚子盃を俯伏いてとる拍子に、飯蛸が袂からころ〳〵と。旦那目ばやく、『それは何ぢや』長吉ぬからぬ顔で、疊をたたいて、『おとうひこひ〳〵』と申しました。何ほ蜘蛛あしらひにしても、飯蛸は蜘蛛には見えぬ。隠れたるより顯はるるはなしぢや。

これぢやによつて、人の心は隠されませぬ。心に怒があると、ひたひに青すぢが立ちまする。心にかなしみがあると、目になみだがうかみ、心にうれしみがあると、ほほべたにゑくぼが入り、心にをかしみがあると、笑ひ貌になりまする。是みな心よりして顔へ出まする。目に涙が出て、心が悲しうなるのではござりませぬ。額に筋が立つて、あとから腹の立つのではござりませぬ。何事も心が先ぢや。その心におもふ所は、皆かたちへあらはれまする。これを誠ニ於中ニ、形ニ於外ニと申します。ナント是もで心のゆがみが、隠されるものでござりませうか。口答も心の煩ひ、鼻うたも心のわづらひ、早う養生をいたしませぬと、立煩ひは本腹がむづかしい。もし大病になりましては、耆婆、扁鵲が配劑でも、ごうもいたしかたがござりませぬ。さるによつて、其の大病にならぬうち、心學を御すすめ申しまする。一度本心を御會得なされますると、奇妙なものぢや、ちよつとした身最屓身勝手でも直に胸へこたへまする。

これについて、ある人前かた物語のついでに、さる兩替屋の主人の、得意のはなしなりとて、申されたるは、兩替渡世は、金銀のよしあしを見分けるが肝要ぢや。其の見わけ樣を小者に教ふるに、其の家々にて違ひあれども、この兩替屋の主人のをしへかたは、始より少しも惡錢を見せず、た

扁鵲・史記の扁鵲傳に出づ、その療法の巧みなること驚くばかりにありける。

心學・神道儒道佛法の教を平易に説きたる教、天明年中中

澤道二の創めたるもその本は、石田梅巖に出づ。

兩替屋若干のきりちんを受けて、金銀紙幣などを錢に易ふることを業とする家、兌換舗。

小者小さき用事に召使ふもの、しもべ。

だよろしき銀を日々に見せ置き、しかるよき銀を見覺えたるころ、ソト惡銀を見すれば、忽ちにあしき銀ご知ること、鏡を照らして物を見るが如し。これ一目下に惡銀と見極めることは、最上の銀を見覺えたるゆゑなり。かくの如くをしふる時は、この小者、生涯惡銀を見損ずることなしと申されたるよし承りました。此の話しの眞僞はぞんじませねども、道理においては、成ほど尤なをしへかた、實にあぶなけのない稽古でございます。しかしながら最上の銀を見覺えても、半季一年ほか商賣をして、金銀を取あつかはぬと、又もとの素人方同樣になつて、よしあしを見わけることが出來ませぬと申されました。

是でよう御合點をなされませ。一たび本心を見覺えますると、其のあとから、少し計の身最眞、身勝手が出來ても、直に知れる。なぜなれば、本心のあきらかなる無理のないことを見覺えた故、ちよつとでも無理らしいことは、中々うけつけるものではございませぬ。しかし又本心に遠ざかり本心を見わすれると、以前の通り眞黑になつて、惡銀が見えにくうなりまする、御用心をなされませ。わるうするこ、本心ぢややら惡心ぢややら、我こ我が手に合點が行かず、その暗い心から、おもひつくほごの事が思ふやうに行かぬと、ハアスウ〳〵と、肩で息をせにやならぬ。難儀なものぢや。せめてだまつてなこ居ればよけれど、かりそめにも、苦しいせつないと、腹の中のゆがみを、人にあうては白狀をいたしまする。さりとてはこまつたものぢや、是ぢやに依て、何とぞ一度本心の正銀を見覺え、人欲の惡銀を見損ぜぬやう、どうぞお互に、一生道にはなれぬやうにいたしたうございます。これについて面白いはなしがある。序に聞て下さりませ。

秋も夜寒になりました頃、相應にくらす町人衆が、五六人云合せて、鹿の音をききに行かうと、何か辨當、小竹筒を用意して、ある山寺に、心や

小竹筒竹にて造りたるもので、酒を入れる器である。

入相　日のくれ方のこと。

初夜　夕方から夜半までの稱。

戌の時　戌の時のこと、午後八時頃なり。

四ツ時　今の十時頃のこと。

酒が裏に入る　酒が外に發しないで中にこもること。

すい和尚がある。これを心あてに尋ねゆき、客殿をかりうけ、こまりがけの遊山、鹿の音をまちわびて、歌をよむ人もあり、あちらでは詩を作り、こちでは發句、さいつ押へつ、入相のころになつても、トント鹿が鳴きませぬ。初夜になつても四つになつても、鹿の音は一切聞えず。『これはどうぢや、モウ鹿がなきさうなものぢや』とまてども啼かず。そろ〳〵眠氣はさいて來る。詩も歌もいやになり、あくびに浮世咄もとぎれ、みな默然として居るうちに、五十ばかりの男、盃を前にひかへて、『さて今晩はいづれもさまの御かけで、宵からゆるりと御物語をいたして、能いたのしみをいたしました。しかしながら、私はかやうに樂んで居ますれど、定めて家内のものが、心づかひをいたして居ませうこと、ふとぞんじ出しましたれば、どうやら酒が裏に入るやうに覺えまする』といふ。座中の人か、『それはどういたした譯でござりますぞ』『サア御聞き下さりませ、御ぞんじの通り

馬の耳に風　何とも感ぜぬ事、毛吹草に、馬の耳にあやかれ風の犬櫻（弘永）とあり。東坡の詩に、何殊ニ馬耳東風ニとあり。

一人の悴、當年二十二歳になりまするが、去りとてはこまつた奴で、私が宿に居ますれば、しぶらこぶらと店の用を手傳ひますれど、私のかけが見えぬと、尻に帆かけて遊所がよひ、勿論親類緣者どもも、いろ〳〵と教訓をいたしてくれますれど、一向馬の耳に風同樣、アノ樣な奴に、身代をまかさにやならぬかとぞんじますれば、心細いものでござります、おかげで何に一つ不足のない私の身分なれども、子ゆゑに、毎日毎夜血の涙、さりてはこまつたものぢや』と、息をついて咄されると、傍から四十五六な男が、『イヤ〳〵あなたのは御難儀ミは申すものの、畢竟御子息に金つかはるるといふまでの事で、强ひて御心配にもござりますまい。私などは中々さやうなことではござりませぬ。兎角近年店のものどもが、假初にも引負をいたして、五十兩はままよと、七十兩はままよと、年々の帳面の明き、ようおぼしめして御らうじませ。鼻たれの時分から世話をいたして、どうやら

引負　商家番頭の語、主人代などの物品を他人に賣り、代金滞りて負債となる事。

家内づとめ　かゝりうどの義、他人衣食にのゝ人なる人。

かうやら、少しばかり店の用に立つ時分、引負をこしらへてくれては、主人は何になりまするものぢや。それから見れば、あなたのは、我が子に金を使はれるばかりの事』といへば、またかたはらから、『イヤ〳〵店の衆に金をつかはれるはまだしもぢや。此方ごもは、近頃都合がわるうござつて、得意先がかたはしから倒れまする。あちらでは三貫目、こちらでは五貫目、實に氣の減るやうにござりまする』といふ下から、向ふの席にすわつて居る老人が、扇ばち〳〵ならしながら、『何れもの御愁歎、御尤でござれども、又親類縁者どもから、金の無心をいはれたり、印形をしてくれといはれたり、家内づれのかかり人、これもまたこまつたものでござりまする』と、半分いはさず隣の人が、『イヤ〳〵いづれも樣のは、みな榮耀ぢや、私のつらいことを、御聞きなされて下さりませ。ごうした事やら、家内のものと母との中がわるうござつて、日がな一日牛の角づきあひ、内中がくすぼり

ます故、イッソ里へ歸しませうと思へば、幼少なものは二人もあり、挨拶すれば、女房の最屓をすると、母親の機嫌がそこねまする。女房を叱れば、他人ぢやと思うて、ひとりむごうつらうさつしやると恨み、イヤモウ中にたつた柱で、つらいの苦しいのと、申すやうな事ではござりませぬ』と、拍子に懸つて身の上の難儀ばなし、其の内に一人氣がついて、『ほんにモウ鹿が鳴きさうなものぢや。あまり咄にしこりが來て、鹿の音を聞きはづしたか知らぬ』と、縁の障子を引明けて見れば、大きな鹿が庭先に默然として居る。『是はごうぢや、そこに居るなら、なぜさつきにからなかぬぞ』といへば、鹿がぬからぬ貌で、『イエ〳〵わたしは、おまへがたのなくのを聞きに來たのでござる』というた。ナントおもしろい咄でござりませうが。老いたるも若きも、男も女も、金のあるも金のないも、おしならして晝夜愁歎の聲はやみませぬ。是が皆心の煩ひぢや。畢竟すこしばかりの身最屓

身勝手のために、ならぬ事をむりやりにやりつけうとする無分別から、さまゞの苦を受けるのでございます。一たび本心を會得すれば、ならぬ事はならぬと知り、難儀なことは難儀と合點して、強ひて身を遁れうといたしませぬ。是を中庸には、『富貴、貧賤、夷狄、患難、君子入るとして自得せぬといふことなし』というでございまする。此の味が知れませぬと、苦樂はからだにあるやうに覺えて、心はさきへ捨て置て、ひたすらに形の樂をもとむる所から、奢にうつり、吝嗇になり、却つて心に苦をうけて、泣いてばかりゐる樣になりまする。兎角何事も心の事ぢや。ドウゾ皆樣、御なきなさらぬ樣の御用心を御たのみ申しまする。（休息）

●中庸には●これは中庸の語ではなく、中庸の意を述べたのである。

鳩翁道話　貳の下

心からよこしまにふる雨はあらじ
風こそよるの窓はうつらめ

此の歌は、高祖日蓮上人、身延山御隱居の節の御詠歌でございます。人の心は眞直な生れつき、其の心のゆがむのは、是みな見たり聞いたりするに取られるによつてぢや。夫に窓へ横しぶきにあたるは、畢竟風のためにゆがむのぢや。こ御よみなされた歌でございます。論語に、『子曰、人の生や直し、之を罔ひて生くるは、幸にして免るるなり。』と申して、なるほど人は正直にないと、天地の間には起つてゐられぬ筈の事なれども、心をゆがめてまゞ〳〵と生きて居るのは、ほんの是れがこぼれざいはひこ申すも

●身延山●甲州にあり日蓮宗の本山なり。

●横しぶき●横に吹きかける雨、斜雨。

のぢや。生きて居るとはいふものの、世間で人のやうには申しませぬ。わが神國の教にも、正直を本とすこあれば、何分にも人はすぐでなければならぬ。

旅をして見ますれば、重い雨掛を竹杖一本で輕々と肩やすめする。能う考へて御らうじませ。あの細い竹杖で、二十貫目の重荷が、杖の先にかかつてあらう筈はない。これ全く竹杖を眞すぐにたてゝ置くによつて、二十貫目の重荷がかかつてもをれぬのぢや。ある人の道歌に、

すぐなれば重荷かけてもをれぬなり
世わたるわざの息杖ぞかし

三間間口でも八間間口でも、息杖は大黒ばしら一本、五人ぐらしも十人ぐらしも、旦那どのの心ひとつで、家内中の重荷が持つてあるのぢや。もし旦那の心がゆがむと、家内の重荷がひつくりかへり、大黒柱に蟲がいると、

- 雨掛・旅行に用ゐる行李の類、天秤棒の兩端に掛けて荷ひ行くもの。
- 大黒ばしら・家の中央に立てる太き柱。

轉じては、すべて物事の肝要となるもの丶稱、こゝはその意である。

八間間口がへたばつてしまふ。兎にも角にも眞すぐな力はありがたいもしでござります。大黒柱に蟲が入つたのを、大工どのに見せると、建て直さうより仕樣がないといふ。旦那どのの心に蟲が入ると、これも同じことで、燒直さうより仕かたがない。どうぞ蟲の入らぬ間に、ゆがみを直すことが肝要でござります。斯樣には申すものの、誰ぢやというても、我が心をゆがめうと思ふ人はなけれども、難儀なことは、見るにとられ、聞きにとられて、思ひの外にゆがみます。このゆがむについて、おそろしい咄がございます。

ある御國に三百石ざりの次男、としごろは二十ばかりの人、色情のことについて、若氣のあやまりより、俄に出奔をすることあり。其の節夏のころにて、ことさら夜分なれば、浴衣に大小のみ。袴もきず、懷中ものもなく、城下へしのびて遊びに出たるままにて、其の場よりの缺落なれば、も

とより何の用意もなくて、無二の朋友一人にこの事をあかし、いかがはせんと相談をいたされました。朋友も無分別のわかき人なれば、何の思慮もなく、手紙一通したため、その處より七八里ばかり隔てたる、さる山寺の和尚に知る人のあれば、此の寺へ行き、此の書狀を出しなば、かくまひくれるであらう。國元の樣子はあとより、追々しらすべき間、まづ彼の山寺にかけを隱されよと敎へました。こなたも、無分別な若ざかり、何の用心もなく、心得たりとかの書面を懷中して、ゆかたのままにて城下をたちのきました。さりとては若い衆は無分別なものでござります。諺に、『若いは能いがしどがない』と、親の案じることも、ゆくさきのつまらぬことも、道で難儀することも、辨へのないは、夢のやうなものでござります。或人の道歌に、

わるいとは知りつつわたるままの川

若いはよいがしどがない。若いものはしどけないといふ事。

まんざらの川氣することをたとへていつたのであらう。

鈍なことに、ぶいこと、愚なこと。

流れて淵に身を沈めけり

まんざら若い衆ぢやとて、氣のつかぬのではなけれども、一度思ひつくと、能うてもわるうても、一足あとへ立ちもどることが出來ぬ。ソコデ忽ち行きあたり、鼻打つてから後悔して、鈍なことをした、これはつまらぬといふうちに、又つまらぬことを思ひついて、われとわかでに、淵に身を沈めけりぢや。此の咄のことばがりぢやござりませぬ。兎角若い御衆は、平生のより所が大事ぢや。猫はなまぐさきを好めど、寺に飼はれると據なう精進する。蛇はのらくらとゆがむが持合せなれど、竹の筒に入れられると據なう眞直になつて居る。さかく身をよする所が大事ぢや。わかい衆はこの咄を聞いて、能う腹の中へ立ちかへつて、吟味して御らうじませ。どんな所へ入込んで遊んで居るぞ。中宿か料理屋か、女藝者の古びた所へ這入りこんでゐやせぬか。能う御せんさくをなされませ。

中宿・中宿とも小宿とも、いふ、傾城屋に行く中宿りの家をいふ、多くは上方にあり、江戸にて茶屋といふ。

寺役。こゝは葬式のこと。
目見。貴人に面會すること。
舌長。自慢していふこと、誇りていふこと。
つぶ。粒錢の略。

扨かの御侍は、つひに生れたから親のふところを一日も離れた事のないのに、心がらとて、夜通しに、知らぬ道を彼の山寺へ尋ねて行く。是ほどのはたらきを、主人歟親のためにしたら、大きな顏をなさるであらうに、どうやらかうやら尋ねあたつて、ゆきついた所が山中の古寺。親のまへでさへかがめぬ腰を、滅多におじぎし、彼の手紙を出されるこ、和尙がうけこり、開いて見て、『此の手紙の樣子では、まづ此方にしばらくござらずばなるまい。しかしながら、小僧とてもなく、下男も使はぬ貧僧でござれば、どうで水も汲んでもらはにやならぬ。其の外ふきさうぢやら、又寺役のあるときは、穴を掘つてもらはにやならぬ。マアさう心得て、そこらで足を洗うて、上つて茶嘲でもくはつしやれ』と、目見えに來た門番へいひつけるやうに、舌長にいはるる。かなしいことは、三百石取りでも、國を立ちのきて見れば、つぶ三文まうける術は知らず、踏用とても一文もなし。

藷桶。藷を入れ置く桶。
いなれず。行かれずに同じ。
托鉢。僧が鉢を持ちて讀經しながら街上を巡りて米錢を乞ふこと。
しよざいつれ〳〵なり。退屈なりなどゝ同じ。
臙着。はれなる所へ着て出る物のこと。

さし詰め居さふらふのあたりまへなれば、口惜しながらハイ〳〵いうて、庭のすみで足を洗ひ、和尙のくひ殘された水臭い茶がゆを一ばいすすつて、夜通しのつかれもやすまる事か。猿つかふやうに追廻はされ、仕なれも付けぬはき掃除。ナント氣の毒なものぢやござりませぬか、此のとき親の慈悲を思ひ出し、百まんだら後悔しても、あこへはかへらぬ。是ぢやによつて、足もとのあかるいうちに、用心をせにやなりませぬ。かうなつてからは、藷桶へ足をふみこんだやうなもので、國へもいなれず、寺にゐられず、外に仕おほえたことはなし、これはつまらぬつまらぬと思ふうちに、秋もはや夜寒になつて來る。ある日、和尙が朝から托鉢に出られたあこは、そこらはきしまひ、それからはしよざいはなし、時は八月の中旬、國から着て來たゆかた一枚。汗づいたのこよごれたので、ごろ〳〵としてあゐを、臙着にもタツタ一枚、ソロ〳〵寒さには向うて來る。せんかたなさに、

容殿の縁に寢ころんで、猫のやうに丸うなつて、日向ぼこりして居ながらつくゞくと思へば思ふほど、とんとつまらぬ。國からは便もなし、和尚の顏付も、此のごろはめつきりわるし、寒そらには向うて來る。どうしたら能からう。イッソ腹切らうかと、首括らうかと、腹の中はかき亂したやうになつて、見るとも見ぬともなしに、籠のかたを見やれば、庄屋どのの家が目の下に見える。此の寺は山の尾さきに建つた寺で、容殿の縁から見れば、一村は目の下。庄屋ごのは、寺の縁から人の見て居るとも知らず、村方のあつめ銀を、數を改め包み直して、金戸棚の引出しへ入れらるを、彼の息子は屹と見とめるとぞつこするほどほしうなつた。ここが人の一大事の處ぢや、室鳩巣先生の歌に、

朝夕にたもつわが身はからごろも
たちるにうつせ道のすがたを

縁皆椽に作つてある、皆の字に改めて書いた。原文は緣

あつめ銀年貢運上等の租税取立てて集めた金のこと。

金戸棚を入れる戸棚のこと。金戸

室鳩巣、川時代の儒德者、享保の頃の人。

究竟やうの音便、第一などいふやうな意。

百年目陰謀などの露顯の時いふ語。

あり、あけ舊暦十五日以後の月のこと、朝まで殘る月のこと。

心が心のありごころにないと、何時無分別が起らうやら、こはいものでござります。是ぢやによつて金銀のこりあつかひは、みだりに人に見せるものではない。金銀は人の身に至つて大切なものなれども、能く又人の身を害する媒となるものぢや。何の心もない人でも、是を見るこ何こなう心が出來る。心なければ何ともない筈でござります。兎角おそろしいものは金銀、人に罪をつくらすのも金銀。されこもなければならず、あれば煩はし。さて思ふやうにならぬは、浮世のありさまでござります。何分程ようせねばならぬことぢや。

時にかの息子ごのが、庄屋の金を一と目見るより、身にしみゞゝこほしうなつて、ごうしたら能からうと、縁ばたに寢ころびながら胸算用。つくゞくと足塲を見るに、忍びこむには究竟の家だち、家内は僅に五人ばかり、もし見とがむるものがあつたら、夫こそ百年目、蹴ちらしてあの金を腰に

つけ、幸ひ八月十五日、月はありあけ、立ちのくには至極の勝手ぢや。首尾よういたらば、人しれず盗み取つて、で、どうなりとも身のかた付けは出來るであらう。所詮この山寺にいつまで居たとて、國へ歸られるわけでもなし、和尚の面癖はわるし、身のまはりはうすし、イツソ今夜立退くが上分別ぢやと、無分別のてつぺんを考へ出した。ナント恐ろしいは人の心でござります。心は身のためばかりを思ふもの歟と思へば、又身をそこなふことを思ひ付く。尤も本心は善ばかりなれども、かやうな時にうごく心は、意識ございて、得て惡を思ひつくやつぢや。禪家の語に、『勿レ信二爾之心一、心爾身之仇也。』といつてございます。成程油斷のならぬ心ぢや。ある人の道歌に、

心こそ心まよはす心なれ
心に心こゝろゆるすな

三ケ津、筑前の博多、伊勢の安濃津、薩摩の坊の津をいふ、江戸に京、大阪をいふ。

身のまはりは云々身につけるものが不足だとのことで、金錢衣服のないこと。

てつぺん、天邊と書く、最上なといふ意。

朱子は之を一經十傳に分ち、經は孔子の言、傳は曾子門人の筆錄とする。曾子を述べて傳のことをいふ。

所なふ。大學の此の傳は筆錄せるものを

石川五右衛門

有名な簒賊、秀吉に捕へられて、釜に入れられて殺される。

又大學の傳には、『小人間居爲二不善一、無レ所レ不レ至。』と。兎角身體を隙におくは大きな毒ぢや。どうでのら〳〵として居るこ、碌なことは思ひつかぬ。此の息子殿も、目くらか、イツソいそがしうして走りあるいたら、こんな無分別は起りはせぬ。大それた人の金を盗んで、また人を殺して立退かうといふ分別が、どういふ所から出ましたぞ。チト考へて御らうじませ。昔から家業を精出したものが、盗をするものは、皆家業が嫌ひぢや。御たがひに身の上に立ちかへつて、商賣が好きか嫌ひか、折々穿鑿して見ぬと、腹の中から、何時、石川五右衛門や、熊坂長範が出まいものでもござりませぬ。心に心ゆるすな。折角吟味が肝要でござります。

ソコデかの息子が、イヨ〳〵今夜と一決して、足場を篤と考へ置き、首尾が善うても惡うても、今夜のうちに十里の道は走らにやならぬ。今のうちにとつくりご寢ておいて、晩に疲れぬ用心せうと、目をふさいで見ても、

胸がもやつき寢入られぬ。どうぞ一ト寢入りねたいものぢやと、今度は客殿の方へ向かうて、ころりと寢がへりをして、内をうそ〳〵見渡せば、座敷の隅に六枚屏風が立てゝある。色紙がたの小倉百人首、見るとはなしに見てゐるうち、ふと目にかかつたは、

あひ見てののちの心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり。

何と思うたかかの息子が、此の歌を二三遍吟じて居るうち、俄に心がかはつて來て、今夜の仕業をやめにする氣になつたら、脇の下から冷汗がひつたりと出たと申すこざぢや。これは何で俄に善心になつたのでございませうぞ。此の歌は、中納言敦忠の歌ぢや。歌の心は、思ふ人に一度あひまして、からに、逢はぬ先の心をくらべて見ますれば、逢はぬ先は物思ひがなかつたのに、逢うてから後は、物思ひがたえぬ。と詠んだ歌でございます。今

熊坂長範。西の人。昔鐵賈。
小倉百人首。藤原定家。卿が山荘で百人の歌人の短歌を各々一首づゝ選び、百枚の色紙に書きたる者。
色紙。歌を書く料に四角に切りたる紙。表面には種々の模様あり。
墨付。書くものに墨付がしみつくこと。工合のよいはなざいふにりたのである。
天の網。天網恢々疎而不失とあるよりいふ語。
老の吉次なる者、牛若丸を連れて、青墓の美濃の宿に宿つた時、吉次の財を掠奪せんとし、退治せらる。牛若丸に承安四年の春。

この息子どのも、此の歌で心の立直しが出來たのは、なぜなれば、今此の寺に居れば、國からはたよりはなし、和尚の墨付はわるし、寒ぞらには向ふ。小遣錢はなし、仕おぼえた商賣はなし、仕付けぬはき掃除は苦しし。是はつまらぬと思うて居るが、是をつまらさうとして、今夜庄屋のうちへ忍びこんで、金を取るか、もし見咎められたら切殺すか。よし金を盗みおほせた處が、天の網は遁れぬ。たとへ京大阪へ出て、立身出世をした所が、盗人の名は遁れぬ。けふは顯はれるか、あすは召捕に來るかと、人の噂やく聲も肝にこたへて、廣い天地の間に、五尺の身體の置所がないやうにな つた時のつまらぬのと、今かうやつて居るつまらぬのと比べて見たら、盗をせぬさきのつまらぬ方が遙にましぢや、盗んでからつまらぬ時は、むかしは物を思はざりけりと、其の時後悔役に立たぬ。夫よりこの儘じつと辛抱して居たら、其の内には國から便りもあらう。滅多に狼狽へる所でない

一日に一字云々　童子教といふ本にあり。一字千金にあたるも同書にあり。

と氣がついて、立戻りの出來ましたのは、ナントありがたい歌の德ではござりませぬか。『一日に一字學べは三百六十字、一字千金にあたる。』と。高いものゝやうなれども、今此の場所で見まするとと、中々高うはございませぬ。若此の男が無筆であつたら、此の立ちかへりは出來ませぬ。三十一字が讀めたおかげて、首が胴に付いてある。一字が千兩なら、三十一字で三萬千兩ぢや。ナントあなた方、三萬千兩の金を進上するが、首をおくれなされと申したら、たゞへ千萬兩の金にでも替へる命はないと、仰しやらう。して見れば、一字千金、高いものではございませぬ。どうぞお少さい時から、手習讀物を精を御出しなされませ。此のやうな利益がございます。

是からかの息子どのが、年月をじつと辛抱して居らるゝうち、國元から親類が來て、寺へも厚く禮をいひ。始めて山寺の苦患を遁れました。しかしながら、一旦出奔したものなれば、國元へは歸られず。そのまゝ町人になつて、家業を精出された所が、運よう商賣も繁昌し、歴々の商人になつて、よいかげんな親仁になつた時分、若い人を見ると、昔しの懺悔咄しに、必ず此のはなしが出て、『若い時には、どのやうな不了簡が出ようも知れぬ。もしあひ見ての歌がなかつた位なら、どのやうなことにならうやら、今咄すもおそろしい。』と、毎度ざんげばなしを懇意の人が承りましたを、又私へ話されました。あまりありがたいことゆゑ。今ばん御はなし申します。

懺悔　佛教語、過去の罪惡を全く悔ゆること。轉じて過去の惡事を打ちあけて他人に話たることゝ。後段の意である。

此の息子どのは、能う立ちかへりが出來たものでございます。百人に五十人は、此の立ちかへりが出來にくい。我が身が可愛い〳〵と思ふより、いつしか心を押しゆがめて、たわいもないものになりまする。目が可愛いによつて、面白いものが見たし、耳が可愛いによつて、三味線太鼓の音が聞きたし、鼻が可愛いによつて、掛香や松がね油の匂ひがかぎたし、舌が可愛いによつて、鰻、すつぽん、茶碗蒸しが食ひたし、身體中が可愛いに

掛香　惡臭を避けんが爲に、絹の袋に入れて室内又は便所などに掛け置く香囊物。又たゞ香を包みたる袋、女なども携帶するものにほひぶくろ。

松がね油。松の根のあかーといふもので煉つた油の事。

よつて、商賣がしともない。ソコデ次第に貧乏して、三疊敷にちんからり、百文か米をかひかねる時、こんな苦しい所帶をせうより、たとひ死ぬとも一トおごり奢て死んだら、一生の思ひ出、誰が百年生きるものか。あした死ぬるも、來年死ぬるも、おもへば同じ短い命ぢや。疊の上で往生するも、河原でのたれ死ぬるも、死ぬる味に變りはない。さらば今夜どこでなりと盜みにはひつて、金二三百兩懷中へねぢこみ、おもふ存分奢り散らかし、首取られてしまふ方が、埒あきが早うて樂ぢや。こんな貧乏を長うするは、埒があかいで氣色がわるいと、無分別な石川五右衞門、熊坂の長範が得てあるものでござります。首尾能う盜みおほせる事か、はした金を盜まうとして、思ひの外に引括られ、獄屋の中へうちこまれて、握飯に香のものかぢる時氣がついて、鈍なことをした。やはり元の三疊敷、ちんからりに百が米、貧乏でもわが所帶ぢや。かうやつて居れば、日の目を拜む事はならず、近所あるきもすることならず。我が身體を我ながら、自由にすることのならぬとは、何の因果ぢや。どう見てもうちの貧乏が有りがたう戀しうなる。

首の座罪人を席の上へすわらせて、首を斬る、その座のこと。

跡へん跡の方といふこと。

手にとるなの發句。瓢水の句。續俳家奇人談にあり。

逢見ての後の心にくらぶれば
むかしは物を思はざりけり。

扨御役人の前へ引出され、水責火責のくるしみをうくる時は、はじめの獄屋の中が戀しうなり、早う責苦を助かつて、獄屋へかへつてやすみたいと、むかしは物を思はざりけり、やはりあとが戀しうなる。其の罪人が罪きはまつて、首の座へ直る時、どこが戀しいぞ。たとへ水責火責はおろか、骨をひしがれ肉をさかれても、生命さへあることなら、やはりもとの責苦が戀しい。昔は物を思はざりけり。先繰り〳〵跡へんが戀しうなる。ある人の發句に、

南無三。南無一寶の略。事を過ちて歎息する時發する語。

手にとるな、只野におけよけんげ花。

兎角けふの有りがたいことを忘れて、外を願ふ所から、思ひの外に心が歪む。さらば、人は苦しみに生れたものかといへば、安樂は人の生れつき、先師のいろは歌に、

らくがしたくば心を知りやれ
樂は心の生れつき

此の樂な心を持ちながら、苦んで狼狽るを、譬喩のはなしがございます。

ある獨りものがよう寢て居るとき、隣が火事ぢや。近所はやれそれと騒ぎ立つ、朋友が馬提燈さげて見舞に來た所が、門の戸がしまつてある。南無三、八兵衛飲みすごして寢て居ると見える。燒殺してはならぬと、戸を蹴やぶつて内へはひる。その物音に、八兵衛ふつと目をさまし、狼狽て赤裸で、寢どこから飛んで出る。友だちが持つた提灯、鼻の先へつきつけ、

不知類比較を知らぬこと、輕重を知らぬこと。

『隣が火事ぢや。見舞に來た。』八兵衛喜び、『それは能う來てくれた。其の提灯貸してくれ』と、友達の提灯を借りて手にさけ、赤裸で庭へおりたり、裏へ出たり、又表へかけ出したり、頻りに狼狽さわいで居る。友達が合點がゆかず、『八兵衛何をさがすのぢや。』八兵衛ぬからぬ貌で、『行燈が消えてあるゆゑ、火打箱さがして居る。』といはれた。

これが銘々どもによう似た話ぢや。結構な提燈のあかりを、己が手に持ちながら、火打箱をさがして居るは、やはり闇がりの心持ぢや。明かな本心をお互に持つて生れて、樂はどのやうにも出來るものを、苦しんで一生暮らすは、此の八兵衛の御連中ぢや。この闇い心から物の大小輕重がわからぬやうになり、大切な心のゆがみは捨ておいて、指の屈んだを苦に病んで療治する。ソコデ孟子も御叱りなされて、『此之謂レ不レ知レ類』と仰せられました。猶明ばん御はなし申しませう。(下座)

鳩翁道話　三之巻

『孟子曰く、拱把の桐梓、人苟も之を生ぜんと欲すれば、皆之を養ふ所以のものを知る。身に至りては、これを養ふ所以のものを知らず、豈身を愛することと桐梓に若かざらんや。思はざるの甚しきなり。』扨此の章は前晩のつづきにて、孟子また、たとへをまうけて、御示しなされたのでございます。拱さほ、左右の指を以て圍みましたるを拱といふ。把さは、隻手握りを把と申します。桐とはきりの木、梓とはあづさの木でございます。畢竟『拱把の桐梓』とは、わづか一握りや二握りの、細い小さい樹木でも、それを育てようと存じますれば、必ず之に培をし、養ひをなしてそだつることを知らぬ人はござりませぬ。故に『人苟欲レ生レ之、皆知レ所二以養一レ之者ヲ。』

と仰せられました。サアこゝが入用の所でございます。樹木をそだつることは、養ひがなければならぬといふことを知つて居る人が、己が身を養ふことを知りませぬ。是はどうしたものでございませうぞ。養ふことを知らねばこそ、明けても暮れても思ひ付くことは、錢がほしい、金がほしい、よいものが着たい、旨いものが食ひたいと、得手勝手な事ばかり思ひついて、我が身の倒るゝことも、我が身の害になることもかまはず、無分別ばかり。是れ則ち樹木をそだつることを知つて、我が身を養ふことを知らぬ。故に、『至二於身一、不レ知ヲ所二以養一レ之者ヲ』と仰せられました。ナント人は賢い樣でも、また愚かな所があるものでございます。畢竟わが身を可愛がる樣で、實は可愛がらず、却つてうる本を可愛がることを知つて居るは、ナント無分別ではないかさ、扨こそ『豈愛レ身不レ若二桐梓一哉。弗レ思甚也。』と御叱りなされたのでございます。

さてこゝに身を養ふと申してあれども、強ち身のことばかりではござりませぬ。則ち心の養ひぢや。身心一雙と申して、心を養ふことを知らねば、身を養ふことが出來ませぬ。心を捨てゝ置いて、身ばかり養はうとするは、所謂身贔屓、身勝手と申す、私心私欲のかたまりになりまする。その私心私欲で身を養はうと致しますると、かへつて身をそこなひまする。爰の境が至つてむづかしい所ぢや。心を捨てゝは何もすることはござりませぬ。心をすてゝ、することがあつたら皆身贔屓、身勝手でござります。古歌に、

つくづくと思へばかなしいつまでか
身につかはるゝ心なるらむ

成程心が主人となつて、身を家來としてつかふ時は、皆道にかなひまする。身を主人として心をつかひまするは、心をすつると申すものぢや。道にはづれて、皆身贔屓、身勝手になりまする。此の道理は、能う辨へて居

●尾籠●こいふ語に尾籠の字を宛たるを音讀したるもの。不禮、失禮などの意。

嵐山●京都にあり。

御室●仁和寺の御室のこと。躑躅の花やお室のざかりなどゝいつて居る。

ながら、ヤツパリ身贔屓、身勝手がやめられず。身に心のつかはれて居るは口をしいと詠んだ歌でござります。いかさま、身贔屓、身勝手をする人の腸の開帳に、能う似た咄がござります。至極尾籠な話なれども、眠りざましに聞いて貰はにやならぬ。

これは都のはなしでござりますが、花の頃になりまするとと、嵐山、御室の櫻がりにて、京中の貴賤皆花見にまゐります。其の中には、大家の奥樣、あるひは娘御、または遊女町の藝子女郎、衣裝に花をかざり、こゝを曠と見物にまゐりますろ事ぢや。嵐山までは、京を離れて一里半ばかり、なんぼ美しう飾りたてた娘御でも、『出ものはれもの所きらはず。』といふ譬の通り、途中で便所へ行きたいことがある。流石に野中で尻もまくられず。通り筋の見ぐるしい百姓家へかけこんで『御無心ながら、てうづ場をちよつと御かし下されませ。』と、赤い顏して斷りいひ、裏口へ出て見た所が、う

けしからず。不思議といふやうな意なり。

そぎたない孤だれの雪隱、これには京の女中方が、毎年大きに困ることでござります。成程『人間かしこし』と申して、ある通り筋の小百姓が、此の事を考へ出して、貸雪隱といふ事を始めました。其の越向は、門口に雪隱をたて、側に手水鉢をすゑ、墨ぐろに『貸雪隱一度三文』と書付けた看板を懸けました。尤もこれは甚だ面白い趣向で、至極重寶なことゆゑ、花のころはけしからず流行ります。勿論これは兩德の趣向で、女中がたは、赤い顔して口たれて、きたない目をせいでも、三文で、挨拶なしに、我が家の雪隱へ這ひるやうな顔つきして、用が整ひます。又雪隱の貸元は、三文の貸代を取るばかりぢやない、あとへ糞がのこりますゆゑ、これも至極勝手がよろしい。全く貸座敷から思ひ付いた越向と見えまして、此のごろめつきり身代を能ういたしました。或人の道歌に、

よい中も近ごろうとくなりにけり
隣に藏をたてしよりのち

とかく人の金まうけが羨しうて、又妬ましうて、かち落してなりとも、おのが田へ水を引きたい、例の身贔屓、身勝手の强欲ものが、その村方にござりまして、ある時女房をよんで、相談には『八兵衛が近ごろ貸雪隱で、めつきり錢儲をしをる。おれも此の春は、かし雪隱をこしらへて、八兵衛の金まうけを、たゞきおとしてやらうと思ふが、どうであらうぞ。』女房中々合點せず、『それはこなたわるい分別ぢや。たとへこちの貸雪隱を拵へた所が、八兵衛殿は仕にせも古う、得意もたんとあるであらう。こちはまた新店なり、はやらぬ時は貧乏の上ぬり、それはやめにさつしやるがよからう。』といへば、『イヤ〳〵それは、われが何も知らぬによつてぢや。此のたびおれが思ひ付いた雪隱は、八兵衛のやうなきたない雪隱ではない。當時京の町は、茶の湯がはやると聞いたゆゑ、茶がたの雪隱を立てるつもりぢや。

仕にせ先祖代々より傳はりたる家業父は店のこと。

入節　節のとぢりあつて木目の美しいものゝこと。

きばり縄　大便をする時、持つて力とするもの。

じよりん　輪又は鱗の如き形の木目、如輪目、專らけやきの木目などにいふ。

わらび縄　蕨の根の繩にて造りた縄、能く水に堪ふ。

千家　千の利休を始とす、裏千家、表千家と別れた。

遠州　小堀遠江守政一を祖とす。

有樂　織田有樂齋の始めた流、有樂は源五郎信益の事、又の弟なり。

先づ四本柱は、よしの丸太ではきたない。北山の入節をつかひ、天井は蒲天井にして、蛭釘を打つて、釣釜のくさりをぶらさげて、きばり縄のかはりに用ふるのぢや。ナント奇妙か。窓は下地窓、踏板は欅木のじよりんも く、睾隱しは薩摩杉、穴のくゞりは蠟色ぶち、壁は中ぬりのきりかへし、戸は檜木の長へぎ、白竹おさへ、屋根は杉皮、青竹おさへのわらび縄、大和葺にこしらへ、沓ぬぎは鞍馬石、側に青竹まじりの四つ目垣、橋杭の手水鉢に、かゝりの松は、しよろ〳〵とした女松をあしらひ、千家でも、遠州でも、有樂でも、逸見でも、何でもかでも取こめる拵へ、恐らくはこいつを出したら、八兵衛の雪隱はへたばるにちがひはない。」と、自慢顔にいひならべると、「夫は綺麗でよからうが、貸代はなんぼ取るのぢや。」「知れたこと、一度が八文よ。」「イヤ〳〵それはわるい分別。茶方でも、水方でも、どちらの道、きたない所、三文でも安い方が、ヤッパリはやりさうなこゝぢやに、必ずそれは止めにして下され。」こいへは、「何をぬかすやら。女さかしうて牛賣れぬと、細工は流々仕上げを見居れ。」と、かの亭主が無理な工面して、到頭此の春の間に合ふ樣に、立派な雪隱をこしらへました。勿論看板は、醫者ぢのか坊樣をたのんだと見えて、唐樣で、「貸雪隱一度八文。」と書いて出した。ようしたものぢや。錢が高いと、なんぼ綺麗でも借人がない。猫の子も覗いて見をらぬ。ソコデ女房がぼやき出し、「これだによつて、止めさつしやれといふに、仰山な錢かね入れて、此の仕舞はどうするのぢや。」と、疊たゝいてわめけば、亭主はおち付いた顔付して、「何もやかましくいふことはない。明日はおれが得意廻りをして來ると、借人が澤山出來る。われも早う起きて、行李飯をつめて置け。一ぺんかけ廻つて來ると、門前市を爲すこと疑なし。」と、太平樂をいひちらして、その夜は寢る。女房は合點が行かねど、朝早う起き、飯を燒き、行李飯をつめると、

を入れて却つて破談にして仕舞ふこと。

唐様 隷書篆書などのこと。

ぼやき出し なき出すこと。

わめく 大聲でさわぐこと。

行李飯 辨當飯といふに同じ。

門前市を爲す 門前に多く人の集まること。韓駒の詩に莫レ言門如シ市。とあり。

太平樂元、雅樂の曲名、破陣樂の事、轉じて、勝手次第のこと、をいふ事。

文殊芽 文殊は妙吉祥、又は妙德と譯す。門を司智慧菩薩なる故に、智者の代表には多く文殊智慧を推して一番と稱せら る。芽は芽菩薩

親父は何時もより朝寢して、四ツ時分に目を覺し、茶づけ食ふご身ごしらへ、ぱつち尻からげ、かの行李飯を首筋へ括り付け、小遣錢を懷へ入れ、出かけに、『コリヤ嬶、得意まはりして來るご 夥しい借人がまらう。モシ糞がつかへたら、中入札をかけて、隣の次郎兵衛をたのんで、一荷も二荷も取つて貰へ。』と、いひすて〻出で行く。ます〳〵女房は不審が晴れず、どうして得意まはりが出來るぞ、京の町を、『何村の何兵衛が方で、貸雪隱貸雪隱。』ご、菜や大根賣るやうに、觸れあるくのか知れぬと、思案して居る所へ、錢筒へ八文、錢をなげこんで、一人雪隱へ這つた人がある。此の人が出ると、入りかはり〳〵、引きもきらず借人が出て來る。嬶はびつくりし、貸代を取りはづすまいと、目の玉をきよろつかして、雪隱の脇に張番をして居ると、後には段々糞がつかへる。ソコデ中入札をかけて、一荷糞を汲み上げる。また追々に借人がある。到頭日の暮までに、雪隱の貸代八貫文とりあげ、糞を五荷くみ出した。ソコデ嬶ひとり歡び、何さま此方の親仁は、文殊芽の再來か、さるにても得意まはりは、どうして仕られたことぢややら、此の樣に流行るといふは、ありがたいことではあると、酒を買つて待つところへ、亭主がのろりと戻つて來て、『どうぢや、借人はあつたか』といふ。『あつた段か、貸代が八貫、糞が五荷、こなたはどうして得意廻りをさつしやつた。京の町を一軒々々、こころ書を持つて、賴みに這ひらしつたか。』ご問へば、亭主は、『何をぬかし居るやら、おれが得意まはりといふは、今朝うちを出て、すぐに三文出して、八兵衛が雪隱へ這ひり、内からかけ金をかけて、一日隣の雪隱をふさげたのぢや。人が戸をあけかゝるご、内からエヘンと咳ばらひすると、はづんではあるし、おれが所の雪隱へかけ込み居るのぢや。アヽ今日は仰山な咳拂して聲が嗄た。此の永い日を一日つくばうて居たれば、持病の疝氣が起つた。』ご、腰を撫

といひ、善の字と薩の字の上のサだけを取つて、速記上の便利にしたから始つたのである。

ていはれた。

ナント面白い咄でござりませうが。これがこれ、小人凡夫のはらわたの開帳ぢや。己が金銀の儲けたいも、人の金銀をまうけたいも、同じことなれば、少しは思ひやりもありさうなもの。なれども、我と人とは別々なものぢやと覺えて、我が勝手さへよければ、人は轉けても倒れてもかまはばこそ。爰を大事と、わが身勝手をいたしまするは、皆わが身を養はふと思ふのぢや。是が大まちがひと申すもので、人とわれとは愚か、萬物と我と一體。此の道理が知れぬによつて、人我の隔をなし、めぐり〳〵て我が身の害になることを知らぬ。ひどいものぢや、わが身勝手をおもひ付くと、むさい事もきたない事もうち忘れて、春の日の永いのに、一日雪隱のうちで、蟇のやうに、目ばかりぱち〳〵して居て、臭とも思はず。まだある、晝時分になると、首筋にくゝりつけた行李飯を取出して、雪隱の中で辨當

とけても たふれる、ところぶ。

人我の隔 他人と自分とのわけへだて。

をつかひまする。これが女房子に見せられた姿か。かやうに申すは、雪隱の事ではござりませぬ。腹の中のむさいきたない店おろしを、たとへて申すのでござります。ある人の道歌に、

我が心かゞみにうつるものならば
さこそすがたの見にくかるらめ

しかしながら、此のやうな人は日本の地にはない。得て唐や天竺にはあるやうに承はりました。是ぢやによつて、『至二於身一而不レ知レ所二以養一レ之者。豈愛レ身、不レ若二桐梓一哉。弗レ思甚。』と孟子の仰せられたも、無理ではござりませぬ。わが身を愛する愛すると思うて、思ひの外に損ひまする。是について恐ろしい話がござります。序にお聞き下さりませ。

これは東國のことでござりまするが、相應に暮しまする百姓がござつて、夫婦の中に娘一人、その外召使の下男下女が五六人、かの娘が十三になり

ました。母親が風の心地こ打臥しましたが、わづか五七日で相果てまする
と、あとは爺親と娘、親類村内から、後妻を入れよこすゝめますれど、か
の亭主の了簡には、後妻をむかへて、自然繼子繼母の中が、睦ましう行か
ぬ時は、我も苦勞し、娘も亦不便なり、何こぞ此のまゝで娘の成人を待た
んこ、餘程辛抱はして見られたれども、何分娘の年齒はゆかず、家内の取
締をしてくれるものがないと、奉公人が育ちにくい。據なうあれこれと聞
きあはせ、幸ひ近村に相應の人柄があつて、やがてこれを迎へこり、家内
の世話をして貰はれました。時にかの後妻は、はなはだ親切にむすめを養
育する。娘も亦、かゝさま〳〵というて慕ひまする。そこで親爺も大きに
安堵し、月日を送りまする中に、彼の後妻が懷姙をいたして、程なく一人
の男子を生みました。ソコデ爺親はよろこびの中に、また氣にかゝることも
出來て、後妻が生みの子を可愛がつて、先妻の娘を惡むやうになつたら

ば、至つて難澁なことぢやこ、案じわづらうて居ましたが、案じるより生
むがやすいと、實子が出來て後、ますゝ繼子娘を可愛がる。中々わけ隔
ては見えませぬ。これで父親も大によろこび、親子四人が睡ましう明しく
らして、娘は十七才になり、男子は三才になりました。ある夜の寢物語に
亭主がいふには、『こなたがござつた時は、まだ娘は十三、何のわきまへも
なかつたが、早十七になつたれば、今は牛にも馬にも踏まれる氣遣ひはな
く、依つて思ふに、どうぞ能い聟を貰うて、此の家を讓り、こちら夫婦が
その小兒を連れて、新宅でも構へ、心安う世を送らうこ思ふが、こなたは
何と思はしやるぞ』ソコデ女房が、『それは何よりありがたい事、私もはや
う隱居して、世事の世話が助かりたい。どうぞはやう聟をもらはつしやれ。』
と、機嫌よう承知しました。亭主は大に安心して、それより一月ばかり立
つて、用事につき、一夜宿に彼處に參りました。その夜はいつもの通り、

七つ夜　今の四時頃のこと。

繼母も娘も召使ひも、夫々の夜なべ仕事、寢る時分から、在中の事なり、下男も下女もごこへやら、こそ〳〵と出てゆくあとには、母親は小兒を添乳して寢る。娘も部屋へ入つてねる。夜はしん〳〵と更けわたつて、七つまへと思ふころ、かの繼母が寢處からそつとぬけ出で、そこらの襷を取つて、娘の部屋へしのび込み、よう寢入つてゐる娘の首に、かの襷をまきつけ、力にまかせて〆殺さうとしました。思ひがけなき事ゆゑ、娘は驚きさま、襷に左右の手をかけて〆させまいとする。母親は乘掛つて〆殺さうとする。行燈は消えて眞くらがり、母親も聲をたてず。娘も驚いて聲も出ず。狼の喰ひあふ樣に暗闇で上になり下になり、つかみ合ひましたが、到頭母親が娘のたぶさ髪をつかんで、裏の方へ引きずつて出る。隣は遠き在中のこと、折ふしその夜は眞の闇、半町ばかり引きずつて出たが、側にある野中の井戸へ、かの娘を投込まうとする。娘は井戸へはまるまじと、母親に

おく山の歌　善惡（西蒔鏡）にある。榮西禪師の歌である。

取りつくを、踏みたふしかいつかんで、井戸の中へ難なく打ちこみ、跡〆も見ずして、母親は家に歸り、そこら取りかたづけ、何氣なき體で、小兒の添乳をして寢入りたるは、恐しい繼母のふるまひ、ある知識のうたに、

おく山の杉のむらだちともすれば
おのが身よりぞ火を出しける

チト考へてごらうじませ、四年このかた、中のよかつた繼子繼母、たちまち手の裏を返すやうに、毒惡な繼母の仕かた。此の恐ろしい心はどこから來たぞ。うろたへると、銘々どもの腹の中にも、此のやうな鬼が住んで居ようともしれませぬ。折々立ちかへつて腹の中を吟味せぬと、思ひの外に鬼の玉子がへり付いてあらうとも知れませぬ。油斷は一切なりませぬ。此の繼母が嫁入りして來る時に、先方へ往たら繼子娘惡んで、〆殺さうといふ分別をして、嫁入りして來るものぢやない。サアごういふ處から此の

心が出てまゐりましたぞ。四年の辛抱、タッタ一夜の寢物語に、娘に聟を取つて讓らうというた亭主の一言で、此のおそろしい心になりましたのぢや。なぜなれば、亭主のある間は、たとへ新宅構へても、聟や娘が大事にもせう、若し亭主が目をふさいだら、娘は先妻の子なり、聟は近ごろの入人なり、我が身は後妻のことなり、ちひさいものはあるし、決して婚や娘に追まはされて、口をしい日を送るであらう。さればとて、娘を取ることは廢しにさつしやれといへば、繼子娘を惡むやうで、亭主への聞えもわるし。どうぞ我が生みの子に跡を取らせ、亭主はなくとも、かまど將軍で威勢ばり、おのがまゝに暮らしたいと、惡念が萠してより、どうぞして繼子娘を人しれず失ひたいと、此の三十日、夜も晝も寢ても覺めても、念々こゝに在つてわすれず、つひにおそろしい志になつて、今娘をころしたのぢや。是全く己が身の最屓より、ひいきの引倒しといふものになつて、

かまど將軍
家庭内で威を振ふ。
人が獨りを吹草
毛を永代
ふ、日本に
やり。
藏等あ

とんぼがへり
蜻蛉の身を飛んで火に入る夏の蟲
飛んで火に入る夏の蟲、おのが身よりぞ火を出しける。
繼へすが如く、物のひつくりかへつること、轉倒すること、といふ。

鬼貫
鬼貫の人、伊丹上島の事。死後に大いに名高くなつた人である。

一念化生
自分の一念で胎生、濕生、卵生、化生の四生に化はること。

飛んで火に入る夏の蟲、おのが身よりぞ火を出しける。これが是れ身を愛するの間違、可愛いのゝんばがへり、畢竟亭主の一言を惡う耳に留めたゆゑ、此のやうな大騒動、鬼貫の發句に、

やゝはれて鬼になつたる祭かな

亭主の一言にやゝはれて、四年の辛抱は水の泡、心にもあらで鬼に成つた祭かな。ナントこはいものぢやござりませぬか。是みな身最屓身勝手からぢや。御用心なされませ。どうやらする拍子に、一念化生の鬼女となります。鬼女ぢやというて、口は耳までさけてあり、髪を手にから卷いて、笞杖を振りあげ、鱗形や、絞盡しの衣裝をきて、足拍子を踏んでゐるものぢやござりませぬ。可愛らしい口もとして、繼子や娘をかみこなす、安達が原の黑塚は、得て京にも田舎にも、折ふしあるやうに聞えまする。甚だこはいなさけない事でござります。どうぞ心の鬼の出ませぬやうに。御吟

味をなされて下さりませ。（休息）

しもと　笞のこと、人を打つむち。

鱗形　如き模様のこと。

安達が原　黒塚の安達が原の黒塚にはこの鬼はれりといふ歌あり。「誠か」といふ。

拾づ　讃集に出づ。昔こゝに鬼が居たと云。或人が自分の奥の陸奥の居るのにやつたよのんだ。

中やつい　ぢき、ちよつと。などいふ意。

鳩翁道話　參之下

年を經てうき世の橋を見かへれば
さてもあやふくわたりつるかな

何さま人間一生の間には、火事にも逢ひ、地震にも出あひ、大雷、大風洪水、飢饉、其の外思ひがけない災難をかうむる人もあるもの、中々ついは、年のよゝれぬものでござります。幸にそんな目にあはぬ御方は、ありがたいと思召せ。五十年三十年のあとをふりかへつて見れば、うき世の橋をさてもあやふく渡りつるかな。能う命があつたものでござります。

扨かの娘は、罪なくして繼母の手にかゝり、井戸の中へ投げこまれたれば、所詮助かるべき道はない。爰がありがたいものぢや。わるい事をせぬ御蔭で、不思議にこの娘のいのちを助かりました。其のゆゑは、始め井戸

へうちこまれた時、幸にさかさまに落ちいらなんだ。順に井のそこへ落ちとゞまり、そのまゝ浮くと、忽ち井戸側へ手をかけて、水を飲まぬ用心し、あがらうともがけども中々上られず。聲を限りに助けてくれよと叫びました。折節夜明前に、隣の人が早うおき出で、田を見まはりに出かけました所が、どこやら女の聲がする。不思議に思うて、聲をしるべに窺ひますれば、井戸の底ぢや。さては井戸はまりこ心得、さま〳〵にして引きあげて見れば、見知りある隣の娘、何ゆゑぞこ問ふ間もなく、かの娘が上がると其のまゝ、氣絶いたしました。夫から大騒ぎになり、近所へ知らせ、内へ知らす、繼母はびつくりしたが、息が絶えてあると聞いて、少しは落ちつき、何くはぬ顔で、『夜前から見えませず、亭主は留守なり、忍び男の方へでもまゐつたのかと、心づかひに存じましたが、これは思ひよらぬことが出來ました。』と、人まへつくつて泣く〳〵いへば、近處の人も氣の毒がり、

世の中をのがれたるは、罪を重ねたるとかけたのである。

歌つみ重ねたると積み重ねたるとに

天網恢々疎而不レ失ハ。

老子に云。天網恢々疎而不レ失ハ。とあり。

先づ家へ死骸を舁ぎこみ、醫者よ鍼たてよとたち騒ぎ、親類も追々寄つて來る。亭主の方へも飛脚をたてる。氣つけなど色々用ひ、身を暖めますること、彼の娘が息を吹出しました。さては人心地が付いたかと、皆々よつて介抱をするうち、やう〳〵氣が確かになり、親類隣家の人は喜ぶ。臺所でまゝ母は茶の下をたきながら、蘇生したと聞いて胸を冷し、もうかけ出さうか、井戸へ飛びこまうか、どうしたら能からうと、胸は早鐘を撞くごとく、惡の報いは早いものぢや。ある人の歌に、

世の中をめぐり車のわがうへに
つみかさねたる果てのくるしさ

天網恢々疎而不洩というて、天の網は至極ゆるやかなやうなれども、中々洩らすものではござりませぬ。因果歴然、用心をせにや成りませぬ。

さて親類中は、かの娘を中に取りまき、『どういふわけで井戸の中へおちい

つたのぢや。』と口々にとへば、娘はため息をついて、『昨夜は何時もの通り夜なべをして、其のうち寝入りましたが、何かは知らず、こはい夢を見まして、これはと思うて目がさめたれば、井戸の中へ落ちてをりました。それから助けて下されというたことは覺えて居ますが、又そのあとはどうなつたが覺えませぬ。』といへば、親類中が、そのこはい夢は、どのやうな夢であつたぞ。其の譯をいへ。』といふ。娘は只『こはい夢でござつたとはかり、繼母とも、どうしたとも更にいはず、唯『こはい夢ぢや。』このみいうて居りまする。ソコデ親類中も譯がわからず、「大方狐狸のしわざであらう、まづ怪我はなくて重疊ぢや。』と、家々にかへりまする。母親も娘がわけをいはぬが幸ひと、ぬつぺりと押強よう、『どんな夢を見やつたのぢや。定めてこはかつたであらう。』と、是も表向の口上ばかり、その内に爺親も戻りまして、これも譯が知れねば、狐狸のわざにして、何事なう此の一件がをさ

まりました。たゞ繼母は明けても暮れても、底氣味わるうおぼえおするゝされ共娘は敢て色に出しませぬ。ナント孝心な娘ではござりませぬか。古歌に、

深山木のそのこずゑこは見えざりし
櫻は花にあらはれにけり

人の心は恥かしいものでござります。事のない時は、善も惡も押しなべて同じやうに思ひますれど、事にあたるこ、其のおのれ〳〵が平生の志、所作の上にあらはれて、芥子ほどもかくされませぬ。此の娘も、此の一件がなかつたら、只よのつねの在所娘、繼母の毒惡にかゝつたゆゑ、日頃の孝行の志がおのづから顯はれまして、苦しい中にも親の名を出しませぬは、『みやま木のその梢こは見えざりし、さくらは花にあらはれにけり。』ナント健氣な志ではござりませぬか。

また日頃の志がよからぬ方へ志すものは、是れまた事の上にあらはは

所作はたらき、しわざ。

遺教経　正しき名を佛垂般涅槃略説教誡経と云ふ一巻なり。釋迦が將に涅槃に入らんとする時、沙羅雙樹の下に集めて弟子を懇切に遺教を垂れし経典なり。

生洲　遊女の事なり。

緋赤めに　緋染の赤くめにした形に小さく白き斑点あるもの。

おくびの轉であくびに同じ、欠伸。

わげくくり　髪のもとどりの折りまげたる所をくくる事。

番人　番太と同じ。一村の人の罪ある者を檢する役人

壬生忠見　梨壺の五歌仙の一人、後撰集の撰者の一人。

れる。釋迦の遺教經にも、黒竈というてござりまするは、毒蛇のことぢや。則ち銘々の腹の中のたとへぢや。此の毒蛇が常には寢てゐれど、何ぞ事があると、頭をあげて騒ぎ出します。犬が中よう遊んでゐる時、肴の頭を一つ投げてやると、俄に牙をむいていがみ合ふ。この繼母も丁度これと同じ事で、娘に聟を取るといふ一言に黒竈が頭をあげて、この騒ぎを引出しました。是がこれ、日頃氣質をかくしてをりまするけれども、事に當つて毒蛇が跳ねまはるのでござります。是ぢやによりて、お互に平生腹の中をきれいに掃除して、若し黒竈が居をつたら、早う退治して御仕舞ひなさりませ。さうせぬと、折々頭を出しまする。遊所、生洲、芝居、淨瑠璃、鼈甲の櫛笄、緋鹿の子のわげくゝり、茶碗、茶杓、花見、遊山、何で頭を出さうも知れぬ。こはい毒蛇でござります。

さてかの娘は、是ほどの苦しい目にあうても、さらに色目にも出しませぬ。繼母はもとより、是が知れては身の上の一大事ぢやによつて、おくびにも猶出さず。爺親は何も知らず、親類はわけが分らず、どうしても知れまするやうがござりませぬが、こはいものぢや、『莫レ見ニ於隱一』。誰いふともなく、村中でうす〳〵と評判がある。『あの娘の井戸へはまつたは、繼母のしわざぢや。』と、こゝではいひ、かしこではいふ。是がつひに番人の耳に入り、次第に御役人樣の御聞に入つて、かの繼母が忽ち召取になりました。壬生の忠見の歌に、

戀すてふ我名はまだきたちにけり
人しれずこそ思ひそめしか

人知れずこそとは、己獨り知る所で、腹の中のことぢや。いまだ色にも出さず、詞にも猶いはぬけれども、はや世間の人が我が名をいひ立てる。こよんだ戀歌でござります。成程こはいものぢや。何んぼ人の知らぬ腹の

中の事でも、かくれてあるものぢやない。たとへば肝の臓に病があると、目が悪うなる。腎の臓に病があると、耳が遠くなる。腹の中の病が顔へハッキリと出まする。是ぢやによつてかくされぬ。これについて面白い話がございます。

ある家に田舎のほりの丁稚がございました。九年甫を親類へ持つて行けといひつけられて、有馬籠さげて門へ出ましたが、道々の思案に、九年甫といふものは、在所では聞かぬ名ぢや。どのやうなものぞと、蓋を取つてのぞいて見れば、つひに見たこともない旨さうなもの、數を讀んで見れば九つある。さては是で九ねんぼといふものぢやなと、早合點して、忽ち一つ袂へ隠し、殘りを持つて先方へ行き、使の口上をいうて、『此の八ねんぼを御目にかけます』と申したれば、取次の女中がびつくりして、『何いうてぢや、是は九ねんぼぢや。』といふ。さては謀はれたと、袂から一つ取出し

戀歌。戀の意をよみたる歌。

九年甫。蜜柑の一種。

有馬籠。有馬籠は津の國有馬郡邊に産する竹細工なるも有名なるもので、其製品は、籠、籐、椅子類等であるが、手さげ籠のことである。

『實は一ねんぼを隠しました。』と、赤い顔をしられた。是がこれ誰も吟味したのではございませねど、あらはれる道理がある。是ぢやによつて、滅多に物は隠されませぬ。

扨かの繼母がだん〳〵御吟味に逢ひまして、悉く白狀いたしました。全く我が生みの子に家を繼がせんといふ心から、先妻の子を殺さうといたしたる始末。井戸へうち込んだこと、殘らず飢狀にかゝつて、一々申しました。ソコデ早速彼の娘が御召しなされて、其の始末を御尋になりました。所が、娘は何も申しませず。『只その夜はこはい夢を見ましたと思ふたばかり、井戸へ這ひつたのも上つたのも、すべて覺えませぬ。』といふ。御役人樣方が、『それではすまぬ。まさしく繼母が殺さうといたし、又井戸へ投込んだではないか。』と、御尋ねなさる。『イヽエ左樣なことは決してございませぬ。母は常に私を可愛がつてくれまして、中々さやうな事、おそろし

い事がありさうな事ではございませぬ。』といふ。ソコデ御役人樣の仰には『まゝ母がすでに白狀に及んだれば、今更隱しても詮なき事、有體に申せ。』と、賺したり叱つたりなされて、さまゞに御尋ねなさる。されども『一向存じませぬ』ばかり、『さだめてそれはあなた方が、こはい顏をなさるる故、おそれて母がさやうに申しましたか、一切私においては覺えませぬ。』といふ、幾たび御尋ねなされても、只『夢ぢや。』ばかりいうて居る。これ正しく娘のいふ所虛僞に相違なけれども、『子は父の爲に隱す。』といふ眞實の孝心、親を思ふ誠より、僞りていふ所なれば、御役人樣方も、如何ともなされやうがない。たとへ水火の責を以て御尋なされたりとも、又千萬石を以てその心を御ひきなされても、確乎として動かざる孝行の心は、實にありがたいものでございます。これを佛法では、金剛不壞の心と申します。思案や分別で、問はれても云ふまいなどゝ拵へた心は、責苦におどろき、

子は父の爲に隱す　父は子の爲に隱し、子の爲に父の爲に隱すと論語にある。

金剛不壞　多く眞宗等の淨土門語に用ひる。即ち阿彌陀佛より賜りたる固なる信心を金剛不壞なるものに喩へていふ。剛の尤も堅固なるものに故にいふ。

責苦せめる事、苦しむ事。

金銀に眼くれて、必ず動くものでございます。親を思ふ誠は、思案でもなく、分別でもなく、天然自然と生れついた仁義禮智の心、こればかりは動かすことは成ませぬ。

さるによつて、つひに御評定決着して、これほどの大騷が手輕う濟みました。先づ繼母は御叱りの上、居村拂ひになりました。又娘は、これも御叱りにて、『平生うか〳〵と致しをるゆゑ、かやうの騷ぎにもなる、已來きつと相心得よ。』と御叱りにてすみました。

こゝを能う御聞きなされませ。御上の御仁政のありがたい事を。此の娘は世にたぐひなき孝子でございますれば、屹度御褒美を下されたい思召しなれども、此の娘が孝行ものになるゝ、母親の罪が重うなる。夫で御褒美にかへられ、娘を御叱りなされたのぢや。實にありがたい思召し。此のとき御立會の御役人樣方が、娘を御叱りの節は、御落涙なされぬはなかつた

一家中の家政を握つて威張つてゐること。

村拂村を拂ひ出されること。ところ拂ひに同じ。

天竺浪人一定の住居なきもの、浮宿なし。浪人。

と、さる御歴々様の御話でございました。何とありがたい怖ろしい話ではございませぬか。是で篤と御合點なされませ。身最屓身勝手といふものは、わが身のためによい事ぢやと、皆思うてをりまする故、假初にも身最屓身勝手をしては、なりませぬ。然るに此の一件を見れば、身最屓身勝手はとんと役に立たぬものでございます。なぜなれば、此の繼母が娘を殺さうとするしわざは、皆わが身の勝手を思ひ、我が身の最屓をして、實子に跡を繼がせ、まゝ子を殺して、竈將軍になつて、わがまゝをせうといふ身最屓身勝手なれど、その通り旨うは行かぬ。却つて此の身勝手から、我が生みの子にそふ事もならず、奪はうと思うた家にも住まれぬやうになり、村拂になつて忽ち天竺浪人、こんな不了簡の女が親里へ戻つたとて、親たちが、よう戻つたといはれさうなものか。世間への外聞、又は婚の手まへ、敷居端も踏まされは致しますまい。又一家親類ぢやとて、繼子殺さうとした女をかくまふ事は出來ませぬ。親類親子義絶は知れた事ぢや。タツタ一つの了簡ちがひ、我が身の最屓勝手から、忽ち廣い世界も狹うなる、天に跼り地に蹐して、五尺の身體のおき所がないやうになりました。ある人の道歌に、

天に跼り地に蹐きあし

詩の小雅にあり。曲躋は足を累ぬるを云。跼めること、身を跼は長怖するの甚しい事。

世の中を四尺五寸となしにけり
五尺のからだ置所なし

ナントこれが身の最屓したのでございませうか。身の勝手でございませうか。畢竟ひいきの引倒しといふものぢや。皆これ身を滅す所以のものを樂むのぢや。又娘は身の勝手身のひいきをちつとも致しませぬ。其の證據は、しめ殺されても、井戸へ打ちこまれても、少しも繼母を恨みず、こかく繼母の難儀にならぬ樣と、年も行かぬに夢ぢやといふ一言、取りつきやうのない事ぢや。是が思案から出たのでもなし、又學問して勘辨の上で言

うたのでもない。只親を大事と思ふばかりで、我が身のことを少しも構ひませぬ。是がほんの我なしと申すものぢや。此の我なしこゝふものは、有りがたいもので、身の勝手をせぬ故、却つて身の勝手になりまする。願はずして家の相續が出來、御上より、世間にも孝行なものぢやこ譽められ、する事爲す事勝手のよい事ばかりになる。眞實の身最屓身勝手がなされたくば、我なしに御なりなされませ。我なしというて、體が消えて仕舞ふのではない。おれがといふ心がなくなるのでござります。さりながら此の我なしにはつい成りにくい事で、皆御幼少から、出家をしたり、學問をなされたり、孳々として御勤めなされるは此の我なしになりたいばかりでございます。幸に先師石田先生、手島先生相繼いで、此の我なしになられる仕やうを御傳授下された。尤もかやうに申せば、何やら箱傳授のやうにも聞え、又石田手島の兩先生が御作爲なされた道のやうに聞えますれども、全く左樣ではござりませぬ。ひとへに堯舜の道に溯つて、少しも私の分別を交へず、聖賢の敎を和らげ、人は無我の生れつきぢやといふことを御示し下されたゆゑ、銘々どものやうな文盲なものでも、聊か道の片端を辨へ、その無我が生れつきぢやこいふことを會得して見れば、おれが〳〵といふ事は、さすがに恥かしうて頭も出されませぬ。されば此の我なしになる道に御進み下されい。此の我なしにならぬと、わが身を愛する〳〵と思うて居て、思ひの外に身を害し家を亡ぼします。さるによつて孟子も、『豈愛身不レ若二桐梓一哉。弗レ思甚矣。』こ御叱りなされたのでござります。猶明晩おはなし申しませう。（下座）

石田先生・石田梅巖の事。丹波桑田郡の人、貞享二年に生る。

手島先生・手島楮庵のこと。京都の人、享保三年に生る。

箱傳授・箱の中へ入れて大切にしまつて置き容易に人に示さぬ事。

堯舜・堯舜の道支那古代の聖天子の道、堯は帝堯、舜は舜帝のこと。

莫逆・意氣投合して心に逆ふところなき友人の事。

宗師・大宗師の子莊篇に出づ。

爾汝・互に遠慮することなく、キサマと呼びあふ友だちのこと。

圓機・括法に見ゆ。

鳩翁道話は正編三卷と續三卷と續々編三卷とあるが、正編が面白いといふ人もかるが、續續々編が面白いといふ人もある。しかし何れもよく出來てゐて、殆んど優劣がないといつてもよいと思ふ。因つて茲に正編を終へ、更に後編全部を校訂したのである。

續鳩翁道話　壹之上

『太甲の篇を引いて、明德を明らかにするの仕樣をお示しなされたのでございます。』とは、則ち大學の傳にして、書經太甲の篇を引いて、明德を明らかにするの仕樣をお示しなされたのでございます。まづ『諟の天の明命。』といふは、お互に持合せた本心の事ぢや。この本心は、手前勝手に拵らへたものではなく、則ち天より稟得ましたもので、仁義禮智信の德を具へ、親にむかへば孝、主人にむかへば忠、兄弟仲よう、夫婦睦ましう、朋友には眞實のまじはり、何一つ不自由な事なく、物に應じて自在なる故、明德とも申します。則ち本心の尊號でございます。たとへば、人に仁義あるは、天に日月のあるやうなものぢや。もし天に御日さまやお月さまがなかつたら、世界は暗闇、人も是と同じことで、仁義の良心を失うたらば、親子夫婦の辨へもなく、主從の差別もしれず、家内一

太甲書經の太甲篇にあり

明命天が我に與へたもので、所以の我のもつて爲す所以德のものである。常に目前にあつて明らかに何時でもいなくてはならぬものである。ふの明命とは天から命ぜられた本心の事。